

授業科目名：情報化社会と倫理	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 岡村 起代之
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報社会（職業に関する内容を含む。）・ 情報倫理		
授業のテーマ及び到達目標 高等学校情報科免許状取得のために、高等学校情報科教員としてふさわしい知識、教育技術態度等を身に付ける。また、共通教科「情報」や専門教科「情報」、他教科等との関わりやICT活用の知識を身に付け、情報科教員として幅広く実践を行うことができる。			
授業の概要 「情報化社会と倫理」は高等学校の教科「情報」の教職課程における必修専門科目のひとつである。情報化が社会に及ぼす影響、情報倫理等を理解する。 主たる内容は、情報化と社会、著作権等の知的所有権、情報モラルなど。			
授業計画 第1回：情報セキュリティ 第2回：不正侵入 第3回：個人認証 第4回：コンピュータウイルス 第5回：ネットワークの故障や障害 第6回：インターネット上にある情報の危険性 第7回：データの紛失 第8回：情報セキュリティポリシー 第9回：企業におけるバックアップ 第10回：情報モラルと私たちの生活・総合演習に向けて(1) 第11回：人権・プライバシーの保護・総合演習に向けて(2) 第12回：知的財産権・総合演習に向けて(3) 第13回：心身への影響 第14回：総合演習 第15回：情報化社会における倫理、まとめ 15回の講義終了後にテストを実施する。			
テキスト 授業で配付するプレゼンテーション資料			
参考書・参考資料等 高等学校学習指導要領（平成30年7月告示 文部科学省）			

高等学校学習指導要領解説 情報編（平成30年7月 文部科学省）

授業中適宜資料を配付配付する。

学生に対する評価

平常点（授業での発表等）（20％）、授業への貢献（50％）、レポート・テスト（30％）

授業への参加度、レポート提出、課題活動成果の提出によって総合評価する。

東洋大学の評価基準に従って成績を付与する。

授業科目名：情報化社会と職業	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 岡村 起代之
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報社会（職業に関する内容を含む。）・ 情報倫理		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)企業における情報活用の事例を説明できる。			
(2)情報技術を活用したビジネスモデルについて説明できる。			
(3)情報化社会における情報を扱う職業人としての職業観、労働感と職業倫理について説明できる。			
授業の概要			
「情報化社会と職業」は高等学校の教科「情報」の教職課程における必修専門科目のひとつである。			
情報通信技術（ICT）の急速な発展と利用拡大により、過去のビジネスパラダイムが崩壊し、社会変革を引き起こしている。企業において情報の収集、発信、活用が企業の存続に係わるほどに重要性が高まってきている。また個人の生活文化までも変容させるほど影響を及ぼしてきている。			
本講義では、情報化社会において情報通信技術がどう活用されてきているのかを事例を通して学び、情報化社会における情報にかかわる職業人としてのあり方（資質・能力・必要な知識・技能など）について、職業生活における様々な視点から学ぶ。さらに、情報の扱いに対するモラルの変容や企業の危機管理についても概観を学習する。インターネットの普及によりビジネス環境は大きく変わりつつあるが、プラスの面だけでなく、影の部分についても理解を深めインターネットを安全に効果的に使う方法の概観を学ぶ。			
授業計画			
第1回：私たちの生活を取りまく情報システム			
第2回：企業における情報活用の事例			
第3回：企業における情報発信・情報公開			
第4回：情報技術を活用した新しいビジネスモデル			
第5回：ビジネスモデルと業務改善企画の立案			
第6回：情報技術によるビジネス環境の変化			
第7回：情報化社会における職業観、労働感と職業倫理(1)			
ー情報化社会で活躍する人材、情報技術スペシャリストー			
第8回：情報化社会における職業観、労働感と職業倫理(2)			
ー情報化社会と人材育成、情報倫理ー			

第9回：情報技術の基礎（セキュリティ技術等）(1)

ーセキュリティリスクと不正アクセス、セキュリティ対策

第10回：情報技術の基礎（セキュリティ技術等）(2)

ー企業・組織体のセキュリティー

第11回：企業における情報犯罪の被害事例と危機管理・総合演習に向けて(1)

第12回：インターネットによる新しいビジネスの創出・総合演習に向けて(2)

第13回：インターネットにおける犯罪事例・総合演習に向けて(3)

第14回：総合演習・情報に関する特許の保護と今後のあり方

第15回：明日の情報社会と情報弱者への対応・まとめ

15回の講義終了後にテストを実施する。

テキスト

授業で配布するプレゼンテーション資料

参考書・参考資料等

高等学校学習指導要領（平成30年7月告示 文部科学省）

高等学校学習指導要領解説 情報編（平成30年7月 文部科学省）

「一般教育シリーズ 情報と職業（改訂2版）」（駒谷昇一・辰巳丈夫 共著、オーム社）

学生に対する評価

平常点（授業での発表等）（20%）、授業への貢献（50%）、レポート・テスト（30%）

授業への参加度、レポート提出、課題活動成果の提出によって総合評価する。

東洋大学の評価基準に従って成績を付与する。

授業科目名：入門プログラミング	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：
			上原 稔、増田 正人
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ コンピュータ・情報処理		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)知識：JavaScriptの文法を理解し、説明ができる。			
(2)技能：基本概念を組み合わせた簡単なプログラムを作成し実行できる。			
(3)態度：事前・事後学習できる。成績評価の方法を理解し、計画的に学習できる。			
(4)表現：作成したプログラムをわかりやすく説明できる。			
(5)その他能力：開発環境を使うことができる。			
授業の概要			
本科目は、プログラムの未経験者がはじめてプログラミングを学ぶための科目であり、主としてプログラミングの原理を学ぶことを目的とする。プログラミング言語としてJavaScriptを採用する。講義内容はデータ、変数、配列、条件判断、繰り返し、関数、アルゴリズムなどの基本概念を含む。			
授業計画			
第1回：ガイダンスおよび序論			
第2回：JavaScriptとは			
第3回：基本文法：基本記法、変数			
第4回：基本文法：データ型、演算子			
第5回：配列			
第6回：条件分岐			
第7回：条件分岐演習			
第8回：繰り返し			
第9回：繰り返し演習			
第10回：関数			
第11回：関数演習			
第12回：オブジェクト			
第13回：組み込みオブジェクト			
第14回：特別課題（Javascriptプログラミングの課題レポート）と解説			
第15回：特別課題（第14回までの授業内容についてのまとめとToyoNet-ACEでの小テスト）			
テキスト			
ToyoNet-ACEにてPowerpointで作成した資料を配布する。			

参考書・参考資料等

「確かな力が身につくJavaScript「超」入門」（狩野祐東 著、SB Creative）

「改訂新版 JavaScript本格入門」（山田祥寛 著、技術評論社）

「基礎から徹底的に学ぶJavaScript Kindle版」（鶴田正信 著）

学生に対する評価

学修到達目標の(1)知識、(2)技能、(3)態度、(4)表現、(5)その他能力の達成度を、課題レポート（50%）と期末小テスト（50%）により評価する。

成績評価は、東洋大学成績評価基準に準拠する。

ただし、授業回数の1/3を超えて欠席した場合、成績評価の対象としない。

授業科目名：プログラミング技法Ⅰ	教員の免許状取得のための必修科目	単位数：2単位	担当教員名：上原 稔、増田 正人
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ コンピュータ・情報処理		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)知識：Pythonの文法を理解し、説明ができる。			
(2)技能：基本概念を組み合わせた簡単なプログラムを作成し実行できる。			
(3)態度：事前・事後学習できる。成績評価の方法を理解し、計画的に学習できる。			
(4)表現：作成したプログラムをわかりやすく説明できる。			
(5)その他の能力：学習環境（Google Colaboratory）を使うことができる。			
授業の概要			
これからのAI、ロボット社会で情報システム開発に最も広く使われると注目されるプログラミング言語Pythonの基礎を学習する。授業内容は基本文法、データ構造、制御構文、関数、クラスなどの基本概念を主とする。また、Pythonのディープラーニングやビッグデータ処理への応用を支えている種々のライブラリについても解説する。			
授業計画			
第1回：ガイダンスおよび序論			
第2回：Pythonとは、学習環境Google Colaboratoryの使い方			
第3回：基本文法（1） — 基本記法、標準入出力、四則演算			
第4回：基本文法（2） — データ型、変数			
第5回：基本文法（3） — 演算子			
第6回：データ構造 — リスト、タプル、集合、辞書			
第7回：制御構文 — if文、for文、while文			
第8回：御文 — break、continue、pass			
第9回：ファイル入出力、例外処理			
第10回：関数			
第11回：クラス			
第12回：数値計算ライブラリ numpy、描画ライブラリ matplotlib、			
第13回：データ分析ライブラリpandas、機械学習ライブラリscikit-learn			
第14回：ニューラルネットワークライブラリTensorFlowとKeras			
第15回：第1回～第14回の総まとめ			
テキスト			
ToyoNet-ACE上でPowerPointで作成した資料を配布する。			

参考書・参考資料等

「かんたん Python」（掌田津耶乃 著、技術評論社）

「わかるPython [決定版]」（松浦健一郎、曹雪 共著、SB Creative）

「スラスラわかるPython」（岩崎圭、北川慎治 共著、翔泳社）

「独習Python」（山田祥寛 著、翔泳社）

「Pythonで動かして学ぶ！あたらしい深層学習の教科書 機械学習の基本から深層学習まで」
（石川聡彦 著、翔泳社）

学生に対する評価

学習到達目標の(1)知識、(2)技能、(3)態度、(4)表現、(5)その他の能力の達成度を課題レポートで評価する。

成績評価は、東洋大学成績評価基準に準拠する。

ただし、授業回数の1/3を超えて欠席した場合、成績評価の対象としない。

授業科目名：プログラミング技法Ⅱ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 上原 稔
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ コンピュータ・情報処理		
授業のテーマ及び到達目標			
本科目の到達目標は以下の通りである。			
(1)知識			
1. Javaの原理を説明できる。			
2. Javaの要素的な基本概念を説明できる。			
3. 基本概念の組み合わせ方を説明できる。			
4. Javaプログラムを解読できる。			
(2)技能			
1. Javaプログラムを実行できる。			
2. 10行程度の簡単なJavaプログラムを作成できる。			
3. 問題に応じて基本概念を適切に組み合わせた100行程度のJavaプログラムを作成できる。			
4. 自分で設定した問題のJavaプログラムを作成できる。			
(3)態度			
1. 事前・事後学習できる。			
2. 授業に備えて準備できる。			
3. 成績評価の方法を理解し、計画的に学習できる。			
4. 職業と科目の関係を意識できる。			
(4)表現			
1. 作成したいプログラムを説明できる。			
2. 自分のプログラムを説明できる。			
3. 問題点を説明できる。			
4. 他人のプログラムを説明できる。			
(5)その他能力			
1. 学校の開発環境を利用できる。			
2. 自宅で開発環境を利用できる。			
3. 自分で開発環境を構築できる。			
4. 開発環境を使いやすくするために整備できる。			
上記目標は、学位授与方針のICT活用能力(DP1)における実践的なプログラミング能力を保証する。			

授業の概要

本科目は、初級プログラマー（入門プログラミング履修者）がJavaで実践的なプログラミングを学ぶ科目である。科目の内容は、Javaの基礎、オブジェクト指向プログラミング、GUIプログラミングを含む。

本科目は、カリキュラムマップにおいて、システム開発能力を身につけるためのプログラミング技法1に続く科目として位置付けられている。

本科目は、学位授与方針のICT活用能力(DP1)におけるプログラミングの応用力を涵養する。

授業計画

各回の授業内容は以下の通りである。

第1回：ガイダンス・講義内容の概要説明

第2回：Eclipse / Eclipse exercises

第3回：Data Types, Methods / Array, Input/Output

第4回：Porting JavaScript to Java / Class

第5回：OOP (Object-Oriented Programming) / Inheritance

第6回：Abstract class, Interface / Polymorphism

第7回：Exception / TDD (Test Driven Development)

第8回：java.io / java.util

第9回：Swing / Layout

第10回：Components / Graphics

第11回：Puzzle / Animation

第12回：Business / GUI exercises

第13回：Design / Implementation

第14回：Debug / Test

第15回：第1回～第14回の総まとめ

テキスト

ToyoNet-Aceにてコースウェアとして配信する。

参考書・参考資料等

「新わかりやすいJava 入門編」（川場 隆 著、秀和システム）

「新わかりやすいJava オブジェクト指向徹底解説」（川場 隆 著、秀和システム）

「Java GUIプログラミング」（日向俊二 著、カットシステム）

学生に対する評価

成績評価の方法：

- ・小レポート(3回) 30%
- ・小テスト(3回) 30%
- ・最終レポート(1回) 40%

これらは知識、技能、表現力を学修到達目標に基づき評価する。

成績評価の基準：

- ・ 本学の成績評価基準に準拠する。

授業回数の1/3を超えて欠席した場合、成績評価の対象としない。

授業科目名：アルゴリズムの基礎	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：
			上原 稔
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ コンピュータ・情報処理		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)知識：基本的なデータ構造とアルゴリズムの知識を習得。			
(2)技能：アルゴリズムを読み解き、解析できる技能の習得。			
(3)態度：自分でアルゴリズムを深く探求する態度を身につける。			
(4)表現等：アルゴリズムを他者に分かりやすく説明できる技能を身につける。			
授業の概要			
効率的なプログラムを開発するための技術の基本であるデータ構造とアルゴリズムの考え方を修得することを目的とする。代表的なデータ構造及びアルゴリズムの使い方を、例題を中心に学んでいく。			
授業計画			
第1回：アルゴリズム入門			
第2回：Python			
第3回：基本的なデータ構造			
第4回：基本的なアルゴリズム			
第5回：配列			
第6回：探索			
第7回：ハッシュ			
第8回：スタックとキュー			
第9回：再帰			
第10回：再帰の事例			
第11回：ソート			
第12回：様々なソート			
第13回：線形リスト			
第14回：木			
第15回：まとめ			
テキスト			
資料を配布する。			
参考書・参考資料等			
「新・明解Pythonで学ぶアルゴリズムとデータ構造」（柴田望洋 著、SB Creative）			

「アルゴリズムの設計と解析 1 (サイエンスライブラリ情報電算機 35)」 (A. V. エイホ、野崎昭弘、J. D. ウルマン、J. E. ホップクロフト 共著、サイエンス社)

「アルゴリズムの基礎」 (五十嵐善英、西谷泰昭 共著、コロナ社)

学生に対する評価

小テスト (60%)、特別課題 (40%) で総合的に評価する。

授業科目名：データベース	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 滑川 光裕
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報システム		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)データベースの基礎知識（概念や歴史など）を説明できる。			
(2)データベースの重要な機能や概念（トランザクション処理や障害回復機能など）を説明できる。			
(3)データベースの設計ができる。			
(4)データベースの種類と特徴を記述できる。			
(5)SQLを使った問い合わせを行うことができる。			
(6)データベースの最新の利用動向（ビッグデータやデータマイニング）と問題点（プライバシー問題）を述べることができる。			
授業の概要			
データベースは、業務システム構築には必要不可欠であり、我々の日常生活においても、多くの場所で利用されている。			
本講義では、データベースについての基本的な概念を学び、さらに歴史的な発展について学ぶことで、データベースを深く理解する。さらに、データベースを研究やビジネスなどの現場で活用するためには、データマイニングやビッグデータ解析が必要となりつつある。			
具体的には、データベース管理システムの基礎技術を習得し、演習（Web上のテスト）を行う。授業では、調査レポートを作成することで理解をさらに深める。さらに、データベースシステムの仕組みと利用方法、データモデリングなどについて習得する。さらに、データベース利用の事例として、ビッグデータ、データマイニングについても学ぶ。			
授業計画			
第1回：授業ガイダンス／データベースとは？			
第2回：データベースの概要			
データと情報についての違いを考え、実社会でのデータベース利用事例についての説明から現在、どのようなデータベースが使われているかを考える。			
第3回：データモデル			
データベースに関するより深い知識と定義、そしてデータモデルの種類と特徴について学ぶ。			
第4回：データベースの重要な機能			
データベースに必要となる機能と仕組みについて学ぶ。			
第5回：データベースの信頼性とシステムの評価			

データベースの信頼性を測るための評価方法と、システム全体の評価について学ぶ。

第6回：データモデルとDBMSの関係

データベースを構築する上で欠かせないデータモデルの考え方と、それを実現するためのDBMSの分類、表記法について学ぶ。

第7回：RDB入門

現在のデータベースの基本となるRDBの特徴と、仕組みについてを用語とともに学ぶ。

第8回：RDBの考え方、RDBの演算（その1）

RDBの詳しい仕組みと様々な制約、そしてリレーショナル演算について学び、演習を行う。

第9回：RDBの演算（その2）

RDBの演算（前回からの続き）と設計方法について学ぶ。

第10回：SQLの特徴・機能・利用形態、SQL基礎演習（その1）

RDBを実現するための言語であるSQLの特徴・機能・利用形態について学び実際に演習を行う。

第11回：SQL基礎演習（その2）

SQLを自分のパソコンで利用する方法と基本的な定義について学び、簡単な演習を行う。

第12回：SQL応用演習（その1）

SQLのより高度な演習を行う。

第13回：SQL応用演習（その2）

SQLで間違いやすいケースについて考えながら、演習を行う。

第14回：ビッグデータとデータマイニング

データベースをより高度に利用するビッグデータやデータマイニングについての説明を行い社会での実例を用いた分析方法についての演習を行う。

第15回：「データベース」のまとめ解説と課題・オンラインテスト

テキスト

教材となるPDF資料を授業ごとにネット上で配付するので、それを各自、印刷してもらう。

参考書・参考資料等

「データベース」（魚田勝臣、小碓暉雄 共著、日科技連）

「データベースのしくみ [第2版]」（山本森樹 著、日経B P社）

「データゲースエンジニア養成読本」（岸本拓也、瀬 貴則ほか 共著、技術評論社）

「書き込み式SQLのドリル [改訂新版]」（山田祥寛 著、日経B P社）

※追加の参考書を授業時に提示する。

学生に対する評価

成績については、授業内外のワークシート提出と、小テスト、レポート課題提出により評価を行います。なお、それぞれの最終成績評価の配分としては、テスト関連が60%であり、ワークシートとレポート課題が40%となる。

授業科目名：ソフトウェア工学Ⅰ	教員の免許状取得のための必修科目	単位数：2単位	担当教員名：後藤 隆彰
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報システム		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)知識：UMLを中心にしたソフトウェア開発に関する基礎知識を習得			
(2)技能：仕様を設計化する基本技能の習得			
(3)態度：ソフトウェアを論理的に捉えてかつ広い視点から設計する態度を習得			
(4)表現：UMLによる表現を習得			
授業の概要			
本科目はソフトウェア作成の基礎である構造化分析法(Structured Analysis)及びUML(Unified Modeling Language)の基本概念を学ぶことを目的とする。特に後者のUMLはソフトウェアの図による表記方法として注目されており、ISO/IEC等の国際的な標準化団体でも標準化が行われており、ソフトウェア技術者を目指す者にとって必要不可欠な知識となっている。			
授業計画			
第1回：ガイダンス及び序論			
第2回：ソフトウェアの設計とは			
第3回：構造化分析法（基礎）			
第4回：構造化分析法（応用）			
第5回：UML記述			
第6回：クラス図とオブジェクト図の基礎			
第7回：クラス図とオブジェクト図の応用と演習			
第8回：ユースケース図			
第9回：シーケンス図とコラボレーション図			
第10回：状態図とアクティビティ図			
第11回：UMLを用いた開発プロセス			
第12回：設計のレビュー			
第13回：UMLからプログラムへの変換と設計支援ツールの基礎			
第14回：UMLからプログラムへの変換と設計支援ツールの応用と演習			
第15回：第1回～第14回の講義内容のまとめと特別課題			
全15回の講義終了後、学期末試験期間に、期末試験を実施			
テキスト			
資料を配布する。			

参考書・参考資料等

「演習で身につくソフトウェア設計入門 ―構造化分析法とUML―」（井上克郎 著、エヌ・ティ・イー・エス）

学生に対する評価

成績は期末試験で評価する。成績評価は、東洋大学成績評価基準に準拠する。

授業科目名：ソフトウェア工学Ⅱ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：
			後藤 隆彰
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報システム		
授業のテーマ及び到達目標			
コンピュータアーキテクチャ、プログラミングスタイル、プログラム開発方法、そして関連法規や国際標準に至るまで、ソフトウェア技術者として持っていなければならない基礎知識を幅広く身に付けることが出来る。			
授業の概要			
原則として「ソフトウェア工学Ⅰ」を学んだ後、「ソフトウェア工学Ⅱ」を履修する。「ソフトウェア工学Ⅱ」は、より抽象レベルの高い概念でしかもソフトウェア技術者として知識として持っていなければならない重要な項目を概観する。			
(1) 知識：ソフトウェアな開発モデルやソフトウェアメトリックス、開発モデル、テスト技法等の知識を習得			
(2) 技能：上流工程の設計の基本技能を習得			
(3) 態度：設計において他者とコミュニケーションを取りながら協調して良いものに仕上げていく態度を養う			
(4) 表現：ソフトウェアの特徴等を様々な計量で客観的に表現できる能力を養う			
授業計画			
第1回：ガイダンス及び序論			
第2回：ソフトウェア工学とは			
第3回：ソフトウェアライフサイクル			
第4回：ソフトウェア分析			
第5回：開発プロセス			
第6回：モデリング（UMLの復習）			
第7回：要求定義			
第8回：設計			
第9回：コーディング			
第10回：テスト手法とデバッグ			
第11回：SWEBOK			
第12回：特許・法律			
第13回：各種の規格との関連の基礎			
第14回：各種の規格との関連の応用と演習			

第15回：ソフトウェア開発の実際

テキスト

「トップエスイー入門講座1 実践的ソフトウェア工学 実践から学ぶソフトウェア開発の勘所」(石田晴久 監修、浅井治 著、近代科学社)

参考書・参考資料等

「ソフトウェアエンジニアリング講座」(嘉数郁男、大場善次郎 監修、ITトップガン育成プロジェクト 著、日経BP社)

学生に対する評価

小テスト(50%)、レポート(50%)等で総合的に評価する。

授業科目名：プロジェクト管理		教員の免許状取得のための 選択科目		単位数： 2単位		担当教員名： 増田 正人、後藤 隆彰、 濱 久人	
						担当形態：複数	
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）					
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教科に関する専門的事項 ・ 情報システム					
授業のテーマ及び到達目標							
学習者はこの講義を通じて以下の知識や能力を習得できる。							
(1) プロジェクトマネジメントの8個のパフォーマンス領域を理解する。							
(2) 上記パフォーマンス領域で活用する手法や構築する成果物を理解する。							
(3) PMに必要な原理・原則にはどのようなものがあるかを理解する。							
上記の習得によって、就職活動などの期限が決められた小規模なプロジェクトの実践を行うことができる。さらに企業などに就職した際に企業内でのプロジェクトメンバーとしての活動を円滑に行うことができる。							
授業の概要							
企業や教育機関でプロジェクトマネジメントの活用が進んでいる。限られた期間で複雑で多様な仕事をプロジェクトで実施することが、一般的になっている。独自で新規性のある成果物を、限られた資源や期間・コストで達成するためのプロジェクトマネジメントに関するスキルは、効果的で効率的なチーム活動のための必須条件となっている。							
本講座では、プロジェクトマネジメントの基本知識を、プロジェクトマネジメントの国際標準ISO21500:2021及びISO21502:2020及びデファクトスタンダードであるPMI（Project Management Institute）の「PMBOK(R)ガイド第7版(A Guide to the Project Management Body of Knowledge)」に基づいて学習する。加えて、就職活動を題材にしたプロジェクト活動の実践につながる演習を取り入れ、実践的なプロジェクト計画や管理の方法を理解する。							
体系化されたカリキュラムでプロジェクトマネジメント知識を網羅し、大学在学中の活動および卒業後のプロジェクト活動において活用できるように基礎知識とその実践の知識を修得する。							
授業計画							
第1回：講義概要							
・ 講義の目的と全15回の学習内容を解説し、受講者の講義選択の判断材料とする。							
・ 今後の授業の進め方に反映するために、受講者のプロジェクト経験を確認する。							
【演習】プロジェクト経験							
第2回：プロジェクトとは何か、プロジェクトマネジメントとは何か							
・ プロジェクトとは、プロジェクトマネジメントとは何か。							

- ・価値を実現するためのプロジェクトマネジメントの関連事項
- ・プロジェクトマネジメントの全体像とプロジェクトマネジメントの8つのパフォーマンス領域
- ・プロジェクトマネジメントの世界標準、プロジェクトマネジメントの歴史

【演習】 チームメンバーとチーム作りを考える

第3回：プロジェクトの目的とステークホルダーへの対応

- ・プロジェクトの目的
- ・ステークホルダーとは
- ・ステークホルダー分析

【演習】 プロジェクトの目的とステークホルダーを考える

第4回：プロジェクト・チームを創り上げる

- ・プロジェクト・チームとは
- ・プロジェクト・チームのマネジメント
- ・リーダーシップ

【演習】 リーダーシップを考える

第5回：プロジェクトのライフサイクルを検討する

- ・プロジェクトのライフサイクルとフェーズ
- ・開発アプローチ

【演習】 就職活動のライフサイクルとアプローチを検討する

第6回：プロジェクトの成果物を定義する

- ・要求事項の収集
- ・スコープ定義
- ・成果物の品質

【演習】 就職活動のスコープ定義、WBSの作成

第7回：プロジェクトを計画する

- ・計画で行うべきこと
- ・作業工数、所要時間、コスト、人員を見積もる
- ・スケジュールを計画する

【演習】 スケジュールの作成

第8回：プロジェクトの成功と失敗を考える

- ・ここまで検討した内容を共有する
- ・就職活動プロジェクトにおいて、成功と失敗を考える

【演習】 プロジェクトの成功と失敗

【小テストその1】 第1回から第7回までの内容

【中間レポート提出】

第9回：コミュニケーションと資源を検討する

- ・ステークホルダーとの適切なコミュニケーション
- ・資源を計画する

【演習】資源を計画し、ステークホルダーとのコミュニケーションを考える

第10回：プロジェクト作業を実行し、状況を確認する

- ・プロジェクト作業の実行
- ・作業状況を確認し、対応を行う（メトリクス、ベースライン）
- ・調達を計画し、実践する

【演習】EVM

第11回：リスクと不確かさへの対応

- ・不確かさとは
- ・リスクマネジメント

【演習】就職活動のリスク検討

第12回：プロジェクトに合わせて、開発アプローチをテラリングする

- ・テラリングとは
- ・組織やプロジェクト環境に合わせたテラリング
- ・プロジェクトの状況に合わせたテラリング

【演習】これまでの検討を振り返る

第13回：プロジェクトマネジメントの原理・原則

- ・プロジェクトマネジメントの原理・原則とは
- ・12の原理・原則を理解し、プロジェクトをマネジメントする

【演習】変革を考える

第14回：本講義のまとめ

- ・まとめ【発表および最終レポートの案内】

【演習】プロジェクト計画書のまとめと今後の活動

【小テストその2】第1回から第13回までの内容

第15回：発表

- ・チームでの発表
- ・第15回終了後に最終レポートをまとめる

【最終レポートの提出】

テキスト

ToyoNet-ACEで配布するので、各自授業前にダウンロードする

参考書・参考資料等

「プロジェクトマネジメント知識体系ガイド（PMBOKガイド）第7版」（PMI日本支部 監訳、一般社団法人 PMI日本支部）

「改訂3版 P2Mプログラム&プロジェクト標準ガイドブック」（日本能率協会マネジメントセン

ター)

「情報処理技術者スキル標準プロジェクトマネージャ」

(http://www.jitec.jp/1_17skill/pdf20040329/FE0329.pdf)

「PM育成ハンドブック」 (http://www.ipa.go.jp/jinzai/itss/activity/PM_com.html)

「プロジェクトを成功させる実践力が身につく本」 (濱 久人ほか 著、オーム社)

「よりよくわかるプロジェクトマネジメント」 (日本プロジェクトマネジメント協会 編集、オーム社)

学生に対する評価

次の4つのポイントで評価(100点満点)、東洋大学の成績評価基準に準拠する。

(1) 講義レポート

- ・ 毎回提出の講義レポートの記述内容で評価：20点（5段階で評価し、15回分の合計値を20点満点に換算）

レベル1：提出されている

レベル2：必要項目が記載されている

レベル3：記載内容が自らの活動で記載されている

レベル4：レベル3に加えて、実際に活用された結果と工夫が記載されている

レベル5：レベル4に加えて、今後の活動への活用が記載されている

(2) 課題レポート

- ・ 中間課題レポート：20点満点

レベル1：提出されている：5点

レベル2：必要事項が記載されている：～10点

レベル3：チーム検討結果が記載されている：～15点

レベル4：レベル3に加えて、自らの工夫がある：～18点

レベル5：レベル4に加えて、特に優れた記述がある：～20点

- ・ 最終課題レポート：30点満点

基本記述は、中間課題と同じ、加えて「あなたが考えるPMのあり方」の記述：10点

（記述あり：5点、自らの考えを記述：～8点、自らの考えの記述が優れている：～10点）

(3) 小テスト（2回実施）：10点満点×2回=20点

(4) 発表：10点（発表内容がPMと適合、発表資料がわかりやすい、発表方法に工夫がある、質疑応答が適切）

(5) 上記に加えて、ToyoNetAceのプロジェクトで設定するチームごとの議論を活発に行ったチームは加算

授業科目名：情報システム管理	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2 単位	担当教員名： 増田 正人、後藤 隆彰 担当形態：複数
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報システム		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)知識：情報システム管理の歴史と目的を説明できる。情報システム管理に関する用語と理論を理解し、説明できる。			
(2)技能：情報システム管理の技術を理解し、応用できる。			
(3)態度：事前・事後学習できる。成績評価の方法を理解し、計画的に学習できる。			
(4)表現：調査結果をわかりやすく説明できる。			
(5)その他能力：チームで作業できる。			
授業の概要			
「ソフトウェア工学 I, II」や「プロジェクト管理」の科目を受講することにより、様々な情報システムがどのように作られているか理解できる。しかしながら、情報システムを構築しただけでは安心して使うことができず、情報システムを安定して稼働させるために本科目「情報システム管理」が重要になる。本科目では、情報システムがダウンすることなく稼働していくために必要な情報システムの管理と運用について学ぶ。			
授業計画			
第 1 回：ガイダンス			
第 2 回：復習(ソフトウェア工学・プロジェクト管理)、ダウンとは、ソフトウェアの問題 1			
第 3 回：ソフトウェアの問題 2、ミドルウェア、OS の障害			
第 4 回：ハードウェアの性能不足			
第 5 回：容量オーバー、環境設定・変更のミス			
第 6 回：運用・操作ミス、故障・不慮の事故			
第 7 回：IT サービスマネジメント概要			
第 8 回：運用管理の目的と対象、運用管理の体制			
第 9 回：安定した IT サービスを提供するための活動			
第 10 回：IT サービスを安全に変更するための活動			
第 11 回：より良い IT サービスを提供するための活動			
第 12 回：より良い IT サービスを提供するための活動、ツールの活用、発表会課題の連絡			
第 13 回：JP1 操作入門－ジョブ管理（グループ実習）			
第 14 回：JP1 操作入門－パフォーマンス管理と統合管理（グループ実習）			
第 15 回：成果発表（グループ単位）			

テキスト

「システムはなぜダウンするのか 知っておきたいシステム障害、信頼性の基礎知識」（大和田尚孝 著、日経 BP 社（Kindle 版））

参考書・参考資料等

「システム基盤の統合ノウハウ」（谷口俊一ほか 著、日経 BP 社）

学生に対する評価

学修到達目標の(1)知識、(2)技能、(3)態度、(4)表現、(5)その他能力の達成度を小テストと演習レポートにより評価する。

講義部分（情報システム管理の歴史・目的・考え方・判断力が身に付いたか）を小テスト（50%）により、また演習部分（実際の情報システム管理作業・技術について）の理解度を演習課題レポート（50%）により評価する。

成績評価は、東洋大学成績評価基準に準拠する。

ただし、授業回数の 1/3 を超えて欠席した場合、成績評価の対象としない。

授業科目名：ネットワーク通信入門	教員の免許状取得のための必修科目	単位数：2単位	担当教員名：上原 稔
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報通信ネットワーク		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)知識：通信プロトコルの仕組みについて理解できる。			
(2)技能：コンピュータネットワークを構築するための基礎技術を修得できる。			
(3)態度：コンピュータネットワークの利用形態や利用方法に関し助言できる。			
(4)表現：ネットワーク通信に関する基礎的な内容を説明できる。			
(5)その他：コンピュータネットワーク上でのセキュリティの重要性を理解できる。			
授業の概要			
現在、コンピュータを利用したネットワーク通信は、特別な専門家のみの技術ではなく、日常生活に不可欠な社会基盤の一つと位置づけられる。本講義では、このコンピュータネットワークの基礎について学ぶことを目的とする。			
まず、コンピュータネットワークとはどのようなものかという全体構成を学習する。その後ネットワーク上での情報のやりとり、通信がどのように行われるかを学習する。特に現在の標準であるTCP／IPと呼ばれる通信プロトコル（プロトコルとは通信をするための約束事）を例に、アプリケーションプログラムから物理的な機器まで、情報がどのように作成され、ネットワーク上を流れていくかを学習する。また、セキュリティの問題やネットワークを構築するための基礎的な知識についても学習する。			
授業計画			
第1回：ガイダンス、ネットワークの概要			
第2回：ネットワークの構成			
第3回：インターネットアプリケーション			
第4回：トランスポート層			
第5回：ネットワーク層（1）IP			
第6回：ネットワーク層（2）ルータの役割			
第7回：データリンク層			
第8回：中間試験、学修内容の確認とまとめ			
第9回：物理層			
第10回：通信プロトコルの仕組みに関する実習			
第11回：ネットワークセキュリティ、ネットワーク技術の利用方法			
第12回：待ち行列			

第13回：グラフ

第14回：フローネットワーク

第15回：期末試験、学修内容の確認とまとめ

テキスト

「基本を学ぶコンピュータネットワーク」（菅原真司 著、オーム社）

参考書・参考資料等

「情報ネットワーク」（佐藤健一 著、オーム社）

「ネットワーク技術の基礎」（宮保憲治、田窪昭夫、武川直樹 共著、森北出版）

学生に対する評価

小テスト（30%）、第8回の中間試験（40%）と第15回の期末試験（30%）により評価する。成績評価は東洋大学の成績評価基準に準拠する。小テストと中間試験により学習到達目標の5項目を評価する。

授業科目名：ネットワークコンピューティング	教員の免許状取得のための必修科目	単位数：2単位	担当教員名：上原 稔
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・ 情報通信ネットワーク		
授業のテーマ及び到達目標			
本科目の到達目標は以下の通りである。 (1) 知識（目標Lv 3）：Lv 1. ネットワークの原理を説明できる。Lv 2. ネットワークの要素的な基本概念を説明できる。Lv 3. ネットワークの基本概念を説明できる。Lv 4. ネットワークの応用的概念を説明できる。 (2) 技能（目標Lv 3）：Lv 1. 分散処理を実行できる。Lv 2. 10行程度の簡単な分散処理プログラムを作成できる。Lv 3. 問題に応じて基本概念を適切に組み合わせた20行程度の分散処理プログラムを作成できる。Lv 4. 自分で設定した問題の分散処理プログラムを作成できる。 (3) 態度（目標Lv 2）：Lv 1. 事前・事後学習できる。Lv 2. 成績評価の方法を理解し、計画的に学習できる。Lv 3. 職業と科目の関係を意識できる。 (4) 表現（目標Lv 2）：Lv 1. 作成したいネットワークシステムを説明できる。Lv 2. 自分のネットワークシステムを説明できる。Lv 3. 他人のネットワークシステムを説明できる。 (5) その他能力（目標Lv 1）：Lv 1. 開発環境にアクセスできる。Lv 2. いつでも開発環境にアクセスできる。Lv 3. 開発環境を使いやすく整備できる。 上記目標は、学位授与方針のICT活用能力(DP1)におけるネットワークとプログラミングの活用能力となる。			
授業の概要			
本科目では、コンピュータネットワークの基礎を学んだ学生がネットワークの応用方法を学ぶ。具体的には、ネットワークのしくみを理解し、目的に合わせたネットワークを構成し、ネットワークを用いて計算する知識・技能を身につける。また、ネットワークの歴史を知り、未来を考える。前半ではネットワークの基礎を学び、後半では応用を学ぶ。 本科目は、カリキュラムマップにおいて、「ネットワーク通信入門」および「プログラミング技法Ⅱ」に続く科目として位置付けられている。 本科目は、学位授与方針のICT活用能力(DP1)におけるネットワークとプログラミングの活用能力となる。			
授業計画			
第1回：ガイダンス・講義内容の概要説明			

第2回 : Basics of Networking / Network Services

第3回 : Network Security / History

第4回 : Eclipse / Concurrent Programming

第5回 : Network Programming / Network Applications

第6回 : Sequential, Concurrent, Parallel and Distributed Processing
/ Distributed Programming

第7回 : Network Management / Dependability

第8回 : Advanced Networking / 第1回～第8回講義の中間まとめ（振り返り）

第9回 : Cluster computing / Linux

第10回 : Web computing / Java in Linux

第11回 : Cloud computing / MQTT

第12回 : Edge computing / Special Issues

第13回 : Google / Design

第14回 : Online Game / Implementation

第15回 : 第9回～第14回講義のまとめ並びに全回の総まとめ

テキスト

ToyoNet-Aceにてコースウェアとして配信する。

参考書・参考資料等

「コンピュータネットワーク第5版」（アンドリュー・S・タネンバウムほか 共著、日経BP社）

「基本を学ぶコンピュータネットワーク」（菅原真司 著、オーム社）

「ドラゴンクエストXを支える技術」（青山公士 著 技術評論社）

「情報技術者試験」の過去問題（IPAのサイトからダウンロード可能）

学生に対する評価

成績評価の方法：

- ・小テスト（60%）

情報処理技術者試験の基準で学修到達目標(1)を計測する。

- ・レポート(40%)

ルーブリックに基づき学修到達目標(2)、(3)、(4)を計測する。

成績評価の基準：

- ・本学の成績評価基準に準拠する。

授業回数の1/3を超えて欠席した場合、成績評価の対象としない。

授業科目名：3Dグラフィックス基礎	教員の免許状取得のための必修科目	単位数：2単位	担当教員名：高橋 信雄
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・マルチメディア表現・マルチメディア技術		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)知識：メディアデザイン論の基本概念を理解する。			
(2)技能：理論に基づいて映像、3DCGコンテンツを設計できる方法を習得する。			
授業の概要			
この授業では、映像、3DCGをはじめとした各種メディアに対応した色彩構成等の基礎デザイン理論からそれらを発展させた先端デザイン理論を理解する。複雑な情報やデータなどを媒体に応じたデザインを設計することで、より効果的に視覚伝達することができるようになることを目指す。特に定量的に色彩を体系化した顕色系（色相、明度、彩度）をグラフィックデザイン（同時対比）、映像デザイン（継時対比）に利用する方法や3DCGを活用したコンピュータグラフィックスデザインなどについて講義する。			
授業計画			
第1回：ガイダンス			
第2回：グラフィックデザイン論			
第3回：グラフィック（同時対比）			
第4回：グラフィック（レイアウト設計）			
第5回：映像デザイン論			
第6回：映像（継時対比）			
第7回：映像（モーション設計）			
第8回：3DCGデザイン論			
第9回：3DCG（空間対比）			
第10回：3DCG（スペース設計）			
第11回：WEBデザイン論			
第12回：WEB（相互作用）			
第13回：WEB（インタラクション設計）			
第14回：作品制作			
第15回：講評及び振り返りと到達目標の確認			
テキスト			
適宜資料を配布する。			
参考書・参考資料等			

「心理と情報」（加藤千恵子、多田光利ほか 共著、インデックス出版）

「入門CGデザイン」（入門CGデザイン編集委員会 著、公益財団法人画像情報教育振興協会（CG-ARTS協会）

学生に対する評価

成績評価は、本学の成績評価基準に基づき、学修到達目標（知識、技能）の到達度を総合的に判断し、平常点（授業での発表・発言等）（50%）と期末の制作物（50%）でS～Eの評価を行う。

授業科目名：CG・VR プログラミング	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 河合 浩志
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・マルチメディア表現・マルチメディア技術		
授業のテーマ及び到達目標			
到達目標は、 (1)CG・VRのプログラムの概要が説明できる。 (2)CG・VRのコードを読んで理解できる。 (3)CG・VRのコードを書き換えて新たなプログラムを作ることができる。 とする。			
授業の概要			
本講義の目的は、CG（コンピュータ・グラフィックス）およびVR（バーチャル・リアリティ）のプログラミングの実際を学ぶことである。講義では、CG・VRの詳細をプログラムレベルで学ぶと共に、実習により、より深く理解することを目的とする。			
授業計画			
第1回：ガイダンス			
第2回：CGとVR			
第3回：CG技術1（画像処理）			
第4回：CG技術2（モデリング技術）			
第5回：CG技術3（レンダリング技術）			
第6回：CG技術4（ユーザーインターフェイス）			
第7回：CG・VRプログラミング1（システム開発）			
第8回：CG・VRプログラミング2（ゲームエンジン）			
第9回：CG・VRプログラミング3（プログラミング言語）			
第10回：CG・VR実習1（CGモデリング）			
第11回：CG・VR実習2（ゲーム制作）			
第12回：CG・VR実習3（アプリ制作）			
第13回：CG・VR発表会1（第1グループの発表とフィードバック）			
第14回：CG・VR発表会2（第2グループの発表とフィードバック）			
第15回：第1回～第14回の講義内容のまとめ			
テキスト			
必要な資料をその都度配布する。			
参考書・参考資料等			

「コンピュータグラフィックス」 (コンピュータグラフィックス編集委員会 著、CG—ARTS協会)

学生に対する評価

平常点 (授業での発表・発言等) およびCG・VR作品課題、CG・VRレポートによって到達目標に対する達成度から東洋大学の成績評価基準に基づき評価する。

授業科目名：AI応用	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 増田 正人 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・マルチメディア表現・マルチメディア技術		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)知識：人工知能研究の歴史と目的を説明できる。計算知能に基づく知的情報処理に関する用語と理論を理解し、説明できる。			
(2)技能：計算知能に基づく知的情報処理の技術を理解し、応用できる。			
(3)態度：事前・事後学習できる。成績評価の方法を理解し、計画的に学習できる。			
授業の概要			
近年、ディープラーニング（深層学習）と呼ばれる機械学習技術が脚光を浴び、この技術を用いた画像、音声、テキストなどの知的情報処理システムが盛んに利用され始めている。人工知能Ⅱでは、ディープラーニングを主要な内容に含む計算知能（Computational Intelligence）と呼ばれる知的情報処理の理論を理解し、その応用技術を習得する。			
授業計画			
第1回：ガイダンスおよび序論 計算知能、ソフトコンピューティング			
第2回：ニューラルネットワーク(1) ニューロンモデル、階層構造型ニューラルネットワーク、単純パーセプトロン			
第3回：ニューラルネットワーク(2) 教師あり学習と教師なし学習、ロジスティック回帰、勾配降下法			
第4回：ニューラルネットワーク(3) 3層ニューラルネットワーク、誤差逆伝播法			
第5回：ニューラルネットワーク(4) ディープニューラルネットワーク、勾配消失問題			
第6回：ニューラルネットワーク(5) 過学習と汎化能力、ドロップアウト、アーリーストッピング			
第7回：ニューラルネットワーク(6) 畳み込みニューラルネットワーク			
第8回：ニューラルネットワーク(7) 相互結合型ニューラルネット、ホップフィールド・ネットワーク、ボルツマンマシン			
第9回：ニューラルネットワーク(8) 制約付きボルツマンマシン、ディープビリーフネットワーク			

第10回：分類器、次元圧縮

自己組織化マップ

第11回：データ拡張

画像のデータ拡張、数値のデータ拡張

第12回：進化的計算（1）

遺伝的アルゴリズム

第13回：進化的計算（2）

遺伝的プログラミング、人工生命

第14回：進化的計算（3）

進化的計算演習、進化的計算応用

第15回：人工知能の応用

応用システム、開発ツール、まとめ

テキスト

特になし

参考書・参考資料等

「深層学習」（岡谷貴之 著、講談社）

「詳解ディープラーニング TensorFlow・Kerasによる時系列データ処理」（巢籠悠輔 著、マイナビ出版）

「知識の森（<http://www.ieice-hbkb.org/>） S3群－4編」（電子情報通信学会）

「ソフトコンピューティングの基礎と応用」（馬場則夫、田中雅博、吉富康成、満倉靖恵、半田久志 共著、共立出版）

「はじめてのパターン認識」（平井有三 著、森北出版）

学生に対する評価

学修到達目標の(1)知識、(2)技能、(3)態度の達成度を、課題レポートにより評価する。
成績評価は、東洋大学成績評価基準に準拠する。

ただし、授業回数の1/3を超えて欠席した場合、成績評価の対象としない。

授業科目名：信号処理	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2 単位	担当教員名： 村上 真
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・マルチメディア表現・マルチメディア技術		
授業のテーマ及び到達目標 (1)知識：離散フーリエ変換の理論を理解している。 (2)技能：離散フーリエ変換の利用方法を提案できる。 (3)態度：離散フーリエ変換の利用場面に関して助言できる。 (4)表現：離散フーリエ変換の理論とアプリケーションを説明できる。			
授業の概要 音や映像といったデジタル信号をコンピュータを用いて処理する技術を理解することを目指し、本講義では主に離散フーリエ変換の理論とアプリケーションについて学ぶ。			
授業計画 第1回：オリエンテーション 第2回：基礎理論(1) 三角関数・指数・対数 第3回：基礎理論(2) 微積分 第4回：デジタル信号(1) 音のデジタル表現 第5回：デジタル信号(2) 画像のデジタル表現 第6回：デジタル信号処理(1) 画像に対する空間フィルタ処理 第7回：デジタル信号処理(2) 画像に対する周波数フィルタ処理 第8回：デジタル信号の圧縮 画像データの圧縮(1) 画像圧縮符号化 第9回：デジタル信号の圧縮 画像データの圧縮(2) 画像の周波数表現と圧縮符号化 第10回：フーリエ級数 第11回：フーリエ級数展開 第12回：オイラーの公式 第13回：フーリエ級数・フーリエ級数展開の複素指数関数表現 第14回：フーリエ変換・フーリエ逆変換 第15回：離散フーリエ変換・離散フーリエ逆変換			
テキスト テキストは使用しない。			
参考書・参考資料等 「フーリエの冒険」（トランスナショナルカレッジ・オブ・レックス 著、ヒッポファミリークラブ）			

「オイラーの贈物」 (吉田武 著、海鳴社)

「ユーザーズ デジタル信号処理」 (江原義郎 著、東京電機大学出版局)

学生に対する評価

レポート(100%)により評価する。レポートは離散フーリエ変換のアプリケーションと理論について問う。本学の成績評価基準にしたがって成績をつける。

授業科目名：メディア のための AI プログ ラミング	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2 単位	担当教員名： 村上 真、中林 靖
			担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・マルチメディア表現・マルチメディア技術		
授業のテーマ及び到達目標 コンピュータを使用して実際にメディア情報の認識と生成が行える。			
授業の概要 近年、画像・音声・映像などのメディア情報を機械的に認識・生成する技術が急速に発展してきており、特に人工知能（AI）技術を応用することによって様々な分野に用いられるようになって来ている。この授業では、メディア情報を実際に認識・生成する演習を通して AI 技術の応用的内容を学ぶことを目的としている。			
授業計画 第1回：ガイダンス（村上） 〈PyTorchを用いた演習7回〉 第2回：PyTorchの基礎（村上） 第3回：ニューラルネットワークの学習（回帰問題）（村上） 第4回：ニューラルネットワークの学習（分類問題）（村上） 第5回：全結合型ニューラルネットワークを用いた住宅価格の予測（村上） 第6回：畳込みニューラルネットワークを用いた画像分類（村上） 第7回：学習済モデルによる画像分類（村上） 第8回：学習済モデルによる物体検出・セグメンテーション（村上） 〈Keras, TensorFlow用いた演習7回〉 第9回：Keras, TensorFlowの基礎（中林） 第10回：Keras/TensorFlowの基本文法(中間層数の違いによる学習効果)（中林） 第11回：Keras/TensorFlowの基本文法(入出力関数, Optimizerの効果)（中林） 第12回：人間とAIの問題解決能力の比較（中林） 第13回：データ量の違いによりる学習効果（中林） 第14回：転移学習(理論)（中林） 第15回：転移学習(実践)（中林）			
テキスト なし			
参考書・参考資料等 「Deep Learning」（Ian Goodfellow、Yoshua Bengio、 Aaron Courville 著、The MIT Press）			

学生に対する評価

全 14 回のレポートの内容により評価した上で、東洋大学の成績評価基準に準拠します。

授業科目名：情報科指導法Ⅰ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 岡村 起代之
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
高等学校情報科免許状取得のために、高等学校情報科教員としてふさわしい知識、教育技術、態度等を身に付ける。情報科指導法Ⅰでは、特に共通教科「情報」の指導法を身に付け、授業実践に活かすことができる。			
授業の概要			
高等学校の共通教科「情報」の目標は、「情報に関する科学的な見方・考え方を働かせ、情報技術を活用して問題の発見・解決を行う学習活動を通して、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用し、情報社会に主体的に参画するための資質・能力を育成することを目指す。」としている。			
この目標を生徒に達成させるため、実際の現場の授業を通して、授業をどのように展開、実現するか、教員の立場から実践的・実用的・探究的に深めていく。			
授業計画			
第1回：ガイダンス・情報科の現状			
第2回：教育観の変遷			
第3回：情報科の設立の経緯と情報科の目標・内容			
第4回：専門教科「情報」の変遷と目標			
第5回：指導と評価			
第6回：共通教科情報科の指導法(1) ー情報社会の問題解決ー			
第7回：共通教科情報科の指導法(2) ー情報社会の進展と情報技術ー			
第8回：共通教科情報科の指導法(3) ーコミュニケーションと情報デザインー			
第9回：共通教科情報科の指導法(4) ーコミュニケーションとコンテンツー			
第10回：共通教科情報科の指導法(5) ーコンピュータとプログラミングー			
第11回：共通教科情報科の指導法(6) ー情報とデータサイエンスー			
第12回：共通教科情報科の指導法(7) ー情報通信ネットワークとデータの活用ー			
第13回：共通教科情報科の指導法(8) ー情報システムとプログラミングー			
第14回：情報と情報技術を活用した問題発見・解決の探求			
第15回：情報科の課題と展望・まとめ			
15回の講義終了後にテストを実施する。			
テキスト			

高等学校学習指導要領（平成30年7月告示 文部科学省）

高等学校学習指導要領解説 情報編（平成30年7月 文部科学省）

参考書・参考資料等

「情報科教育法 改訂3版」（久野靖、辰己丈夫 監修、オーム社）

「文部科学省 高等学校学習指導要領解説」

(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1407074.htm)

文部科学省検定済教科書 高等学校情報科用「情報Ⅰ」

学生に対する評価

平常点（授業での発表等）（20％）、授業への貢献（50％）、レポート・テスト（30％）

授業への参加度、レポート提出、課題活動成果の提出によって総合評価する。

東洋大学の評価基準に従って成績を付与する。

授業科目名：情報科指導法Ⅱ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 岡村 起代之 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 情報）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
「情報科指導法Ⅰ」で学んだ知識や技術、技法など、教育法を活用し、高等学校情報科教員として授業実践を行い、生徒の学習目標を十分に達成できる。また、専門教科「情報」や他教科等との関わりやICT活用の知識を身に付け、情報科教員として幅広く実践を行うことができる。			
授業の概要			
高等学校の共通教科「情報」の目標は、「情報に関する科学的な見方・考え方を働かせ、情報技術を活用して問題の発見・解決を行う学習活動を通して、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用し、情報社会に主体的に参画するための資質・能力を育成することを目指す。」としている。			
この目標を生徒に達成させるため、実際の現場の授業を通して、授業をどのように展開、実現するか、教員の立場から実践的・実用的・探究的に深めていく。			
授業計画			
第1回：ガイダンス・教科「情報」の課題			
第2回：専門教科「情報」の科目構成と内容			
第3回：学校における情報科の役割、社会における情報科の役割			
第4回：他教科との連携			
第5回：プログラミングで何を育むのか			
第6回：実用プログラミング			
第7回：コミュニケーションと情報通信ネットワーク			
第8回：多様なコミュニケーションの実現			
第9回：ICTの活用と学習環境			
第10回：情報社会における問題の解決			
第11回：年間指導計画の作成			
第12回：学習指導案の作成　　－授業の工夫－			
第13回：マイクロティーチング(1)　－授業準備と実施－			
第14回：マイクロティーチング(2)　－授業の構成と展開－			
第15回：学習指導案・授業方法の改善、指導と評価			
指導案を作成し、模擬授業を行う			

テキスト

高等学校学習指導要領（平成30年7月告示 文部科学省）

高等学校学習指導要領解説 情報編（平成30年7月 文部科学省）

参考書・参考資料等

「情報科教育法 改訂3版」（久野靖、辰己丈夫 監修、オーム社）

「文部科学省 高等学校学習指導要領解説」

(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1407074.htm)

文部科学省検定済教科書 高等学校情報科用「情報Ⅰ」

学生に対する評価

平常点（授業での発表等）（20％）、模擬授業・授業への貢献（50％）、レポート・各授業回ごとの小テスト（30％）

東洋大学の評価基準に従って成績を付与する

授業科目名 徳教育論	教員の免許状取得のための 択科目	単位数 単位	担当教員名 相賀 由美子
			担当形態 単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事 等			
授業の到 目標及びテーマ			
・ 徳の意義や原理、その歴史と現代の教育課 いじめ、情報モラル等 を理解している。 ・ 徳性の発 に する基礎的理論に基づき、子どもの心の成 について理解している。 ・ 学習指導要 の目標・内容を理解し、学習指導案や指導計画を作成することができる。			
授業の概要			
2015 平成27 年 月、学習指導要 の一 改正がなされ、「特別の教科 徳」が誕生した。 。 徳の教科化により、学校における 徳教育のさらなる充実が期待される一方で、さまざま な課 が山積している状況にあり、これらの課 の解決が急務である。本講義では、このよう な現状をふまえ、 徳の意義や原理、その歴史や国 的動向を概観するとともに、人 および 徳の本質について考える。また、学校の教育活動全体を通じて行う 徳教育および「特別の 教科 徳」の目標、内容、指導計画などについて考察し、理解を深める。さらに、教材研究 や学習指導案の作成、模擬授業の実施を通して、今後の 徳教育 新のかぎとなる授業者とし ての実践的指導力の育成を図る。			
授業計画			
第 回 現代社会における 徳教育の課			
第 回 徳とは何か			
第 回 学校における 徳教育の目標と内容			
第 回 明治期の 徳教育の理念と実			
第 回 大正期・昭和前期の 徳教育の理念と実			
第 回 昭和 年以 の 徳教育の理念と実			
第 回 外国の 徳教育			
第 回 子どもの心の成 と 徳性の発			
第 回 徳教育の指導計画と学習評価			
第 回 学習指導案の作成 小学校編			
第 回 学習指導案の作成 中学校編			
第 回 模擬授業と研究協議 読み物資料の活用を考える			
第 回 模擬授業と研究協議 問 解決的な学習			
第 回 模擬授業と研究協議 徳的行為に する体 的な学習			

第 回 試 ・講評まとめ

テキスト

テキストは使用せず 布する資料を使用する。

参考書・参考資料等

参考書・参考資料等

小学校学習指導要 平成29年7月告示 文 科学省

中学校学習指導要 平成29年7月告示 文 科学省

小学校学習指導要 解説 特別の教科 徳編 平成29年7月 文 科学省

中学校学習指導要 解説 特別の教科 徳編 平成29年7月 文 科学省

「小学校学習指導要 解説 徳編」 文 科学省、東洋 出版社

「中学校学習指導要 解説 徳編」 文 科学省、日本文教出版

文 科学省ホームページ <http://www.mext.go.jp/>

学生に対する評価

・学習姿勢 レポート 期末試 これら つの総合評価。原則として、講義 分の 以上の出席者を成績評価の対象とする。

授業科目名：日本国憲法	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 始澤 真純
			担当形態：単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	日本国憲法		
授業のテーマ及び到達目標			
(1) 日本国憲法に関する基礎知識を習得し、社会人として必要な人権保障や統治機構の在り方を理解する。			
(2) 日本国憲法の制定目的と共に、他の法律との整合性を考察する。			
(3) 日本国憲法の解釈の変化を、社会の変化や世界潮流と関連付けながら学ぶ。			
(4) 法律条文・判例の読み方を身につけ、法律答案の書き方を学ぶ。			
(5) 事例を検討する際には、具体的事実から原告・被告双方の立場を考慮し、自身の見解を構築できるようにする。課題に対し、法的思考をもって理論的に説明ができるようにする。			
授業の概要			
本講義では、日本国憲法に規定される人権保障と統治の原理を学ぶ事を眼目とする。			
「人権論」では、その条文の制定された歴史的・社会的背景とその保護の必要性を学ぶ。「統治行為」では、統治機構とその運用を通じて、権力分立の在り方を学び、日本の政治機構の特徴を捉える。そのため、憲法の条文の内容と共に、それに関する歴史・事例・倫理を学ぶことが重要となる。			
学習の上で大切なことは、条文の暗記ではなく、条文の理解と応用である。憲法の文言は、抽象的である。そのため、文言の意味を理解する「解釈」が重要となる。「解釈」とは、法の条文や用語の意味を正確に理解することである。解釈は時代により変化していく。そのため、憲法はいずれの時代の人権の保障にも対応しうる。これまでの憲法の解釈を学びながら、現代的な理解を深める。今の時代に対応する憲法解釈の応用を学ぶのである。憲法の条文を解釈する際には、日本国憲法の解釈がどのように形成されどのような特徴や問題点を有しているかを探るため、重要とされる判例を紹介し、社会の中での憲法の運用と、問題点についても講義する。現実の社会の中で、憲法の人権保障はどこまで機能するのか、また、人権の対立などをどのように調整していくのかなど、トラブルの解決に憲法がどれほどの効果をもたらすのかについて検討する。さらに、近年の行政権の強大化がもたらす三権分立の問題点や、政治機構をどのように運営していくべきかについても考察する。			
憲法は日本国の最高法規であり、他の法の基礎となる法であるだけではない。日本国憲法の条文は、日本の歴史・思想・法制度を表わすものであり、国のルールを示すものでもある。我々にも身近な問題である校則・契約・婚姻・警察実務などを憲法を通して考察し、日本国憲法が我々の生活に深く関わる法であることを理解することを目的とする。			

* 教育免許状希望者は必ず日本国憲法の単位を修得しておかなくてはならない（免許法施行規則第66条の6に定める科目）。

授業計画

第1回：初回ガイダンス(学習の進め方、六法の読み方、憲法の構造、憲法の分類、日本国憲法の基本原理の説明)

第2回：近代国家と憲法—人権保障の歴史、人権総論

第3回：法の下での平等

第4回：良心及び思想の自由(良心および思想の自由、信教の自由、政教分離)

第5回：表現の自由①(表現の自由の性質—言論・出版の自由、集会・結社の自由)

第6回：表現の自由②(表現の自由の限界—報道の自由、名誉権、プライバシー権)

第7回：経済的自由権(職業選択の自由、営業の自由、居住移転の自由、財産権との関係)

第8回：学問の自由と教育を受ける権利

第9回：社会権(生存権、労働に関する諸権利)

第10回：人身の自由(憲法と刑事訴訟法との関係、刑事手続と逮捕、令状主義とその問題点)

第11回：国会と立法権、選挙制度(権力分立の成立過程、国会の組織と立法過程、選挙制度)

第12回：内閣と行政権(議院内閣制の運用、内閣の権能、総理大臣と議員の地位)

第13回：司法権と裁判制度(司法権の概念、違憲審査制、裁判員制度)

第14回：平和主義と憲法第9条に関する諸問題(平和主義、自衛隊と条約、憲法訴訟)

第15回：第1回～第14回の講義内容の総まとめ

全15回の授業終了後、大学指定の期間に定期テスト(試験)を実施する。

テキスト

「現代憲法入門講義 新6版」(加藤一彦、植村勝慶 編著、北樹出版)

参考書・参考資料等

「エッセンシャル法学 第7版」(大谷實 編著、成文堂)

「法を学ぶパートナー 第3版」(武藤眞朗、多田英明、宮木康博 共著、成文堂)

「憲法 第7版」(芦部信喜 著、高橋和之 補訂、岩波書店)

学生に対する評価

定期テスト(60%)

授業態度・レポート(40%)

以上により総合的に評価を行う。東洋大学の成績評価の基準に準拠して評価する。

授業科目名：スポーツ 健康科学実技Ⅰ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1単位	担当教員名： 一川 大輔
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業を通じ自己の体力と運動スキルを把握し、ルールを深く理解する。自己と他者が相互に関係しながら、コミュニケーションを交わす中で、他者とのコミュニケーションスキルやマナーを学ぶ。スポーツ活動を通じて人間として必要な発達課題を高めることを目標とする。 (1)運動が身体面・心理的に及ぼす効果と運動習慣確立の重要性を理解する。 (2)自己の体力と運動技術に対する理解を深める。 (3)スポーツを通じた対人スキルを高める。			
授業の概要			
本授業は、各学生の体力レベルと技術レベルを考慮し、段階的に運動の基礎を充実するための基礎となる授業を展開する。 バドミントンは誰でも気軽に楽しめるスポーツであり、生涯にわたり楽しむことのできるスポーツであるといえる。授業の内容は、主に初心者を対象として健康・体力向上を図るとともに、必要な基礎知識、基礎技術、ゲームの進め方を学ぶ。また、スポーツを通じて、他人との協調性を持つことも授業の目的である。授業の期間中だけでなく、その後運動することが習慣となり、生涯にわたり健康維持増進、社会的コミュニケーションや親睦を積極的に図ることのできるような意識を養うことを目的とする。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション、受講票作成、スポーツ実技			
第2回：バドミントン導入のためのルール説明、試しのゲーム			
第3回：ラケットティング、打法の練習、簡易ゲーム、簡易な測定評価			
第4回：基礎練習（ヘアピン・ドライブ、ロングサーブ）、半コートでのシングルスゲーム			
第5回：基礎練習（ハイクリア・スマッシュ、ドロップ）、半コートでのシングルスゲーム			
第6回：フルコートでのシングルスゲーム導入のためのルール説明、簡易ゲーム			
第7回：アップダウン形式のシングルスゲーム			
第8回：レベル別のシングルスゲーム			
第9回：ダブルスゲーム導入のためのルール説明、簡易ゲーム			
第10回：ダブルスゲーム導入のためのルール説明、基礎練習（ショートサービス）			
第11回：ダブルスゲームにおけるサービスとリターンの戦略			
第12回：上級者と初級者の組み合わせでのダブルスゲーム			

第13回：アップダウン形式でのダブルスゲーム

第14回：レベル別のダブルスゲーム

第15回：ダブルスゲームでの実技テスト、総括

テキスト

必要に応じて授業時に資料を配布する。

参考書・参考資料等

「教養としての身体運動・健康科学」（東京大学身体運動科学研究室 編、東京大学出版会）

学生に対する評価

①理解（自己の運動とゲームルールに対する理解度）：30%

②技術（初期の技術レベルからの向上度）：20%

③態度（授業に対する積極性と仲間への配慮など）：50%

以上3点から総合的に評価する。

（東洋大学の成績評価基準に準拠する）

なお、授業回数の3分の1を超える欠席は、成績評価の対象としない。

授業科目名：スポーツ 健康科学実技Ⅰ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1単位	担当教員名： 土江 寛裕
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業を通じ自己の体力と運動スキルを把握し、ルールを深く理解する。自己と他者が相互に関係しながら、コミュニケーションを交わす中で、他者とのコミュニケーションスキルやマナーを学ぶ。スポーツ活動を通じて人間として必要な発達課題を高めることを目標とする。 (1)運動が身体面・心理的に及ぼす効果と運動習慣確立の重要性を理解する。 (2)自己の体力と運動技術に対する理解を深める。 (3)スポーツを通じた対人スキルを高める。			
授業の概要			
ソフトボールは誰でも気軽に楽しめるスポーツであり、生涯にわたり楽しむことのできるスポーツであるといえる。 本授業は、各学生の体力レベルと技術レベルを考慮し、段階的に運動の基礎を充実するための基礎となる授業を展開する。授業の内容は、主に初心者を対象として、健康・体力向上を図るとともに、必要な基礎知識、基礎技術、ゲームの進め方を学ぶ。また、スポーツを通じて他人との協調性を持つことも授業の目的である。授業の期間中だけでなく、その後運動することが習慣となり、生涯にわたり健康維持増進、社会的コミュニケーションや親睦を積極的に図ることのできるような意識を養うことを目的とする。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション、受講票作成、スポーツ実技を			
第2回：試合（体力・技術レベルの現状の確認）			
第3回：基礎練習（キャッチボール、ゴロおよびフライ処理）、バッティング練習			
第4回：シートバッティング（守備や走塁の確認）			
第5回：練習試合（ルールとゲームの進め方の確認）			
第6回：チーム決定・作戦会議、チーム練習			
第7回：守備練習（教員主体）、ゲーム			
第8回：打撃練習（教員主体）、ゲーム			
第9回：チーム作戦会議（チームメイトの特性を考慮する）			
第10回：守備練習（チームリーダー主体）、ゲーム			
第11回：打撃練習（チームリーダー主体）、ゲーム			
第12回：チーム別練習			

第13回：フリー練習1（守備・攻撃中心、チームリーダー主体）、リーグ戦

第14回：フリー練習2（作戦中心、チームリーダー主体）、リーグ戦

第15回：第1～14回の総括

テキスト

特に指定しない

参考書・参考資料等

「いちばんわかりやすいソフトボール入門」（宇津木妙子、大泉書店）

「教養としての身体運動・健康科学」（東京大学身体運動科学研究室 編、東京大学出版会）

学生に対する評価

授業開講時数2/3以上の出席を成績評価の対象とし、以下の4点から総合的に評価する。

- ・授業への取り組み（授業に対する積極性や他者への配慮など）：30%
- ・体力・技術レベルの向上度：30%
- ・競技ルールに対する理解度：30%
- ・ゲームの成績：10%

東洋大学の成績評価基準に準拠する。

授業科目名：スポーツ 健康科学実技Ⅰ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1単位	担当教員名： 土江 寛裕
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業を通じ自己の体力と運動スキルを把握し、ルールを深く理解する。自己と他者が相互に関係しながら、コミュニケーションを交わす中で、他者とのコミュニケーションスキルやマナーを学ぶ。スポーツ活動を通じて人間として必要な発達課題を高めることを目標とする。 (1)運動が身体面心理的に及ぼす効果と運動習慣確立の重要性を理解する。 (2)自己の体力と運動技術に対する理解を深める。 (3)スポーツを通じた対人スキルを高める。			
授業の概要			
テニスは世界中の幅広い年代の人々に親しまれているスポーツである。技術的には難しい部分も多いが、上達を感じることも面白さの一つと言える。 本授業は、各学生の体力レベルと技術レベルを考慮し、段階的に運動の基礎を充実するための基礎となる授業を展開する。授業の内容は、主に初心者を対象として、健康・体力向上を図るとともに、必要な基礎知識、基礎技術、ゲームの進め方を学ぶ。また、スポーツを通じて、他人との協調性を持つことも授業の目的である。授業の期間中だけでなく、その後運動することが習慣となり、生涯にわたり健康維持増進、社会的コミュニケーションや親睦を積極的に図ることのできるような意識を養うことを目的とする。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション			
第2回：テニスボール・ラケットになれる（ボールやラケットを使ったコーディネーション）、簡易ゲーム			
第3回：ストロークの基本（フォアハンドストローク、バックハンドストローク）、グリップの説明			
第4回：ストロークの基本（フォアハンドドライブ、フォアハンドスライス）			
第5回：ストロークの基本（バックハンドドライブ、バックハンドスライス）			
第6回：ラリーの基本（ショートラリー、ロングラリー）、ゲームの方法（ダブルスのルール説明、ダブルスの実践）			
第7回：サービスの方法、種類を学ぶ（スライスサービス、スピンサービス、フラットサービス）、テニスのマナーについて、サービスゲーム			
第8回：ボレー（ボレーキャッチボール、ボレーボレー）、ダブルスの戦術（前衛のポジショニング）			
1ゲーム先取勝ち上がりゲーム			

第9回：ストロークの応用（コースの打ち分け、ステップワーク、回り込み）、通常ルール時間制勝ち上がりゲーム

第10回：ストロークの応用（レシーブ、アングルショット）、2ゲーム先取制勝ち上がりゲーム

第11回：ボレーの応用（サーブ&ボレー、ポーチ）、ダブルス3ゲームマッチ

第12回：実技テスト（フォアハンド・バックハンドの打ち分け）

第13回：ゲームの展開（ダブルス5ゲームマッチ）

第14回：ゲームの展開（シングルス5ゲームマッチ）

第15回：ゲームの展開（ダブルス1セットマッチ）、総括

テキスト

必要に応じて授業時に資料を配布する。

参考書・参考資料等

「教養としての身体運動・健康科学」（東京大学身体運動科学研究室 編、東京大学出版会）

学生に対する評価

授業開講時数2/3以上の出席を成績評価の対象とし、以下の4点から総合的に評価する。

- ・授業への取り組み（授業に対する積極性や他者への配慮など）：30%
- ・体力・技術レベルの向上度：30%
- ・競技ルールに対する理解度：30%
- ・ゲームの成績：10%

東洋大学の成績評価基準に準拠する。

授業科目名：スポーツ 健康科学実技Ⅰ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1単位	担当教員名： 奥田 功夫
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標			
(1) 一生涯を通じた健康維持・体力増進を図るための方法を説明することができる。			
(2) 健康三原則（運動・休養・栄養）について説明することができる。			
(3) 適切なトレーニング方法と理論について説明することができる。			
(4) 自分の体の課題解決に必要なトレーニングプログラムの作成を行える。			
(5) 適切な体重コントロールについて説明することができる。			
(6) 安全かつ適切にトレーニング器具を使用することができる。			
授業の概要			
健康維持や体力増進は、生活習慣病やメタボリック症候群が増加する現代社会において重要な課題である。適度な運動習慣を日常生活に取り入れることで、健康維持や体力増進に大きく寄与することが可能である。しかしながら、多くの人はこの正しい方法論を実践的に学ぶ機会を得ていない場合が多い。本授業は単にトレーニング器具の使用方を紹介するに留まる授業ではなく、授業開始時にスポーツ生理学の見地から身体組成の状況と身体機能の状態を正確に把握する。そして健康維持・体力増進のためのトレーニング課題を見つけ出し、課題を解決するための具体的なフィットネストレーニングプログラムを作成するための指導を行う。各種プログラムに取り組むことで安全かつ効果的にトレーニングを遂行するための器具使用方法を習得し、授業後の身体機能の変化を理解することを目的とする。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション、受講票作成、スポーツ実技			
第2回：身体組成（1回目）の測定、トレーニング器具類の使用方の説明、トレーニング記録用紙（ログ）の作成、ウォーミングアップとクーリングダウンの理論、ジョギング・ウォーキング、ストレッチング、クーリングダウン			
第3回：測定結果のフィードバック、トレーニング理論の講義（トレーニング科学の基礎理論、トレーニングの原理・原則）、課題解決のためのプログラムデザイン			
第4回：マシンウエイトトレーニングマシンの正しい使い方（上半身）、レジスタンストレーニングの理論①（上腕部・肩部・背部のトレーニング実施上の注意点とその効果）とプログラム実践			
第5回：マシンウエイトトレーニングマシンの正しい使い方（下半身）、レジスタンストレーニングの理論①（大腿部・下腿部・臀部のトレーニング実施上の注意点とその効果）とプログラム実践			
第6回：マシンウエイトトレーニングマシンの正しい使い方（体幹部）、レジスタンストレーニングの			

理論②（腹部・背部の捻転トレーニング実施上の注意点とその効果）とプログラム実践 第7回：低負荷、低強度トレーニング、自体重を利用したトレーニング、エアロビクトレーニング（脂肪燃焼効果をねらいとした低強度有酸素運動とその効果）とプログラム実践 第8回：フリーウェイトトレーニング導入、ダンベルエクササイズを紹介とプログラム実践 第9回：フリーウェイトトレーニング（スクワット、デッドリフト、ベンチプレス）基本動作の習得、レジスタンストレーニングの理論（トレーニング強度の違いとその効果）、プログラム実践 第10回：フリーウェイトトレーニング（クイックリフト、ハイクリーン、スナッチ）基本動作の習得 プログラム実践 第11回：ジャンプトレーニング、平衡性トレーニング（ボックスジャンプ、スラックライン）プライオメトリックトレーニング、伸張-短縮サイクル、筋パワー、無酸素性パワープログラムの振り返りと再作成、プログラム実践 第12回：エアロビクトレーニング（トレッドミル）によるウォーキングとジョギングとプログラム実践、メディシンボールトレーニング 第13回：エアロビクトレーニング（エアロバイク）によるバイクエクササイズとプログラム実践、メディシンボールトレーニング 第14回：身体組成（2回目）の測定、プログラム実践 第15回：総括および体力・形態・身体組成の測定、測定結果のフィードバック、到達目標の確認
テキスト 必要に応じて授業時に資料を配布する。
参考書・参考資料等 「教養としての身体運動・健康科学」（東京大学身体運動科学研究室 編、東京大学出版会）
学生に対する評価 ・授業開講時数2/3以上の出席を成績の対象とする。 授業に取り組む姿勢（40%）、授業内容の理解度・習熟度（40%）、レポート（20%）の以上3点から総合点で評価し、東洋大学の成績評価基準に準拠する。 なお、授業回数の3分の1を超える欠席は、成績評価の対象としません。

授業科目名：スポーツ 健康科学実技Ⅱ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1単位	担当教員名：
			藁科 侑希
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業を通じ、より専門的なスポーツに対する運動特性を理解し、生涯のスポーツライフに応用できる知識の習得と実践をおこなうことを目標とする。 (1)現在の体力レベルを理解する。 (2)各種目の基本的な運動技術とルールを理解し実践できる。 (3)コミュニケーションツールとしてスポーツが有用であることを学ぶ。 バドミントンと卓球の基礎的技能を習得し、他者と協調・協力する大切さや相手との駆け引きの魅力に触れ、対人スキルを高めるとともに、継続的な運動習慣による基礎的な体力の向上を目指す。			
授業の概要			
本授業は、「スポーツ健康科学実技Ⅰ」を履修し、自己の体力を把握した学生に対して、運動技術を高めるような発展的授業として2種目を行う。なお、「スポーツ健康科学実技Ⅱ」を先行履修することも可能。 授業の期間中だけでなく、その後も運動することが習慣となり、生涯にわたり健康を維持増進することを目指す。またスポーツを通して、社会的コミュニケーションや親睦を積極的に図ることのできるような意識を養うことを目的とする。 バドミントン・卓球ともに、世界中に多数の愛好者が存在し、男女問わず幅広い年齢層の人々によって楽しまれている。この授業では、まずバドミントンや卓球の魅力や特性を理解し生涯スポーツとしてのバドミントン・卓球を楽しむための基礎的技能やルールを習得することを目指す。また、バドミントン・卓球を通じた基礎的な体力の向上を図るとともに、相手やペアと一緒にプレイすることの大切さや駆け引きの魅力に触れ、生涯にわたってバドミントン・卓球を積極的に楽しむことができる、協調性やコミュニケーション能力などの素養を身につけることを目的とする。			
授業計画			
第1回：ガイダンス、オリエンテーション			
＜バドミントン＞			
第2回：基本的なストロークのためのラケット操作			
第3回：基本的なストロークのための身体操作			
第4回：技術課題の学習			

第5回：バドミントンの科学的原理を学ぶ

第6回：バドミントンのルール理解とゲームの運営

第7回：ダブルス・リーグ戦1（前半）

第8回：ダブルス・リーグ戦2（後半）

<卓球>

第9回：基本的なラケット操作

第10回：基本的な身体操作

第11回：移動を伴ったボールのコントロール

第12回：卓球のルール理解とゲームの運営

第13回：ダブルスのための応用練習

第14回：ダブルスの戦術

第15回：ダブルス・リーグ戦

テキスト

必要に応じてToyoNet-ACE（manaba）等で資料を配布する。

参考書・参考資料等

「基本レッスン バドミントン」（阿部一佳、渡辺雅弘 著、大修館書店）

「バドミントンの指導理論 1」（阿部一佳 著、日本バドミントン指導者連盟）

「バドミントン コーディネーション」

（平井博史、渡辺哲義 著、ベースボール・マガジン社）

「卓球基礎コーチング教本」（日本卓球協会 編、大修館書店）

「卓球の教え方の教科書」（下川裕平 著、ブイツーソリューション）

学生に対する評価

※授業開講時数2/3以上の出席を成績の対象とします。

①理解（自己の運動とゲームルールに対する理解度）：30%

②技能（初期の技術レベルからの向上度）：20%

③態度（授業への積極性やToyoNet-ACEの閲覧状況など）：50%

以上3点から総合的に評価する。

最終的な評定は、東洋大学の成績評価基準に準拠する。

なお、授業回数の3分の1を超える欠席は、成績評価の対象としない。

授業科目名：スポーツ健康科学実技Ⅱ	教員の免許状取得のための必修科目	単位数：1単位	担当教員名：一川 大輔
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業を通じ、より専門的なスポーツに対する運動特性を理解し、生涯のスポーツライフに応用できる知識の習得と実践をおこなうことを目標とする。 (1)現在の体力レベルを理解する。 (2)各種目の基本的な運動技術とルールを理解し実践できる。 (3)コミュニケーションツールとしてスポーツが有用であることを学ぶ。			
授業の概要			
本授業は、「スポーツ健康科学実技Ⅰ」を履修し、自己の体力を把握した学生に対して、運動技術を高めるような発展的授業として2種目を行う。なお、「スポーツ健康科学実技Ⅱ」を先行履修することも可能。 授業の期間中だけでなく、その後も運動することが習慣となり、生涯にわたり健康を維持増進することを目指す。またスポーツを通して、社会的コミュニケーションや親睦を積極的に図ることのできるような意識を養うことを目的とする。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション、受講票作成、スポーツ実技			
第2回：バレーボール：ボール慣れ、簡易ゲーム			
第3回：バレーボール：スパイク・サーブ練習、簡易ゲーム			
第4回：バレーボール：パス練習、簡易ゲーム			
第5回：バレーボール：ブロック練習、簡易ゲーム			
第6回：バレーボール：スパイクコンビネーション練習、リーグ戦			
第7回：バレーボール：レシーブコンビネーション練習、リーグ戦			
第8回：バスケットボール：ボール慣れ、簡易ゲーム			
第9回：バスケットボール：パス練習、簡易ゲーム			
第10回：バスケットボール：2対2、簡易ゲーム			
第11回：バスケットボール：3対3、リーグ戦			
第12回：バスケットボール：攻撃戦術立案、リーグ戦			
第13回：バスケットボール：守備戦術立案、リーグ戦			
第14回：バスケットボール：総合演習、トーナメント戦			
第15回：第1～14回の授業総括			

テキスト

使用しない

参考書・参考資料等

「教養としての身体運動・健康科学」（東京大学身体運動科学研究室 編、東京大学出版会）

学生に対する評価

※授業開講時数2/3以上の出席を成績の対象とする。

①理解（自己の運動とゲームルールに対する理解度）：30%

②技術（初期の技術レベルからの向上度）：20%

③態度（授業に対する積極性と仲間への配慮など）：50%

以上3点から総合的に評価する。

東洋大学の成績評価基準に準拠する。

授業科目名：スポーツ健康科学実技Ⅱ	教員の免許状取得のための必修科目	単位数：1単位	担当教員名：一川 大輔
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業を通じ、より専門的なスポーツに対する運動特性を理解し、生涯のスポーツライフに応用できる知識の習得と実践をおこなうことを目標とする。 (1)現在の体力レベルを理解する。 (2)各種目の基本的な運動技術とルールを理解し実践できる。 (3)コミュニケーションツールとしてスポーツが有用であることを学ぶ。			
授業の概要			
本授業は、「スポーツ健康科学実技Ⅰ」を履修し、自己の体力を把握した学生に対して、運動技術を高めるような発展的授業として2種目を行う。なお、「スポーツ健康科学実技Ⅱ」を先行履修することも可能。 授業の期間中だけでなく、その後も運動することが習慣となり、生涯にわたり健康を維持増進することを目指す。またスポーツを通して、社会的コミュニケーションや親睦を積極的に図ることのできるような意識を養うことを目的とする。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション、受講票を作成、スポーツ実技			
第2回：グラウンドゴルフ導入のためのルール説明			
第3回：グラウンドゴルフ導入のためのスイング練習と的当て			
第4回：グラウンドゴルフ導入のためのスイング練習とゲートの通過			
第5回：初級コース設定でのミニプレー			
第6回：中級コース設定でのミニプレー			
第7回：4人一組でのシングルスストロークプレー			
第8回：2人対2人でのチームストローク戦			
第9回：ベストスコア採用によるチーム戦			
第10回：総合スコアによるチーム戦			
第11回：上級コース設定でのシングルスストロークプレー			
第12回：上級コース設定でのチームストロークプレー			
第13回：アルティメットの導入、パスゲーム、簡易ゲーム			
第14回：アルティメット総当たり戦			
第15回：第1～14回の授業総括			

テキスト

使用しない

参考書・参考資料等

「教養としての身体運動・健康科学」（東京大学身体運動科学研究室 編、東京大学出版会）

学生に対する評価

※授業開講時数2/3以上の出席を成績の対象とする。

①理解（自己の運動とゲームルールに対する理解度）：30%

②技術（初期の技術レベルからの向上度）：20%

③態度（授業に対する積極性と仲間への配慮など）：50%

以上3点から総合的に評価する。

東洋大学の成績評価基準に準拠する。

授業科目名：スポーツ 健康科学実技Ⅱ	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1単位	担当教員名： 土江 寛裕
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)基礎的な体力を向上させる。			
(2)ソフトボール、アルティメット、ディスクゴルフの基本的な技術を習得する。			
(3)ソフトボール、アルティメット、ディスクゴルフのルールを理解し、ゲームの進め方を身に付ける。			
(4)スポーツを通じてコミュニケーション能力や協調性を養う。			
(5)生涯に渡って運動を楽しむ習慣を身に付ける。			
授業の概要			
ソフトボールやアルティメット、ディスクゴルフは老若男女を問わずに楽しむことができる安全性の高いチームスポーツである。そのようなチームスポーツを通じて、新たな技術を習得する喜びや他者とコミュニケーションを取ることの楽しさを体験し、スポーツの意義を再認識することを本授業の目的とする。また、ソフトボールには野球とは異なる特有のルールがあるので、そのようなルールを理解しつつゲームを進められるようになること、ニュースポーツに関しては、ルールを理解してゲームを遂行できるようにすることも本授業の目的とする。各学生の体力・技術レベルを考慮し、それらのレベルを段階的に高めるような内容の授業を展開する。本授業を受講することで、生涯に渡って運動を楽しむ習慣を身に付けてもらいたい。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション			
第2回：試合（体力・技術レベルの現状の確認）			
第3回：基礎練習（キャッチボール、ゴロおよびフライ処理）、バッティング練習			
第4回：シートバッティング（守備や走塁の確認）			
第5回：打撃練習、リーグ戦（1回目前半）			
第6回：守備練習、リーグ戦（1回目後半）			
第7回：チーム作戦会議、チーム練習			
第8回：作戦会議、打撃練習、リーグ戦（2回目前半）			
第9回：作戦会議、守備練習、リーグ戦（2回目後半）			
第10回：フライングディスクの導入、バックハントスロー、フォアハントスロー			
第11回：ニュースポーツ1（アルティメット）ルールの理解、基礎練習			
第12回：ニュースポーツ1（アルティメット）ゲーム形式			

第13回：ニュースポーツ2（ディスクゴルフ）ルールの理解、基礎練習

第14回：ニュースポーツ2（ディスクゴルフ）ゲーム形式

第15回：第1～14回の総括

テキスト

特に指定しない

参考書・参考資料等

「いちばんわかりやすいソフトボール入門」（宇津木妙子、大泉書店）

「フライングディスクをやってみようーアルティメットの基礎と応用」

（James Studarus 著、日本フライングディスク協会 監修、師岡文男 翻訳、NAP）

「教養としての身体運動・健康科学」（東京大学身体運動科学研究室 編、東京大学出版会）

学生に対する評価

授業開講時数2/3以上の出席を成績評価の対象とし、以下の4点から総合的に評価する。

- ・授業への取り組み（授業に対する積極性や他者への配慮など）（30%）
- ・体力・技術レベルの向上度（30%）
- ・競技ルールに対する理解度（30%）
- ・ゲームの成績（10%）

東洋大学の成績評価基準に準拠する。

授業科目名：English Presentation I	教員の免許状取得のための必修科目	単位数：1単位	担当教員名：湯舟 英一、カールソン リン レベッカ、黒田 学、日比野 克哉、今井 澄子、菊池 久一、ウルフ 友子、伊東 裕起、今井 宏二
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
授業のテーマ及び到達目標			
(1)プレゼンテーションの内容と構成の理解 [The Story Message]			
(2)プレゼンテーションの実践に必要な姿勢、アイコンタクト、ジェスチャー、声の抑揚などの理解と実践 [The Verbal and Physical Message]			
(3)図表、グラフなど視覚補助素材の作成 [The Visual Message]			
授業の概要			
本講義の目的は英語によるプレゼンテーションの基本スキルの習得、そしてクラスメートの前で自信を持って英語を話す力を身に付けることである。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション			
[The Verbal and Physical Message]			
第2回：姿勢とアイコンタクト			
第3回：効果的なプレゼンテーションのためのジェスチャー			
第4回：声の抑揚			
[The Story Message]			
第5回：イントロダクション			
第6回：結論			
第7回：スクリプトの作成準備			
第8回：第1回プレゼンテーション			
第9回：ボディー			
第10回：根拠と例示			
第11回：切り替えと順序			
[The Visual Message]			
第12回：視覚情報の作成			
第13回：視覚情報の説明			

第14回：スクリプトと視覚情報の作成

第15回：第2回プレゼンテーション

テキスト

「Speaking of speech (Premium ed.)」

(LeBeau, C. 著、National Geographic Learning/Cengage Learning)

参考書・参考資料等

「TEDトーク世界最高のプレゼン術」 (ジェレミー・ドノバン 著、新潮社)

「スティーブ・ジョブズ驚異のプレゼン」 (カーマイン・ガロ 著、日経BP)

学生に対する評価

成績は2回のプレゼンテーション (60%)、受講姿勢 (積極的参加)・クラス内の模擬プレゼンテーションや宿題など (40%) で評価する。プレゼンテーションは教科書69ページに掲載されている構成、他に、姿勢・アイコンタクト・ジェスチャー・声の抑揚・視覚素材の質などを基に評価します。プレゼンテーションの評価の詳細については教科書125ページに掲載されているFinal Performance Evaluation Sheetを参照。評価は、東洋大学成績評価基準に従い「S～E」による評価を行う。

授業科目名：English Presentation II	教員の免許状取得のための必修科目	単位数：1単位	担当教員名：湯舟 英一、カールソン リン レベッカ、宮本 和茂、今井 宏二、黒田 学、新井 眞知、日比野 克哉、今井 澄子、 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
授業のテーマ及び到達目標 本講義の目標として下記が挙げられる。 (1) 効果的で説得力のあるプレゼンテーションの草案 (2) The Story Message and The Verbal, Physical and Visual Messageを中心とした、「English Presentation I」の重要点の復習 (3) 授業内の模擬プレゼンテーションを通して理論の実践			
授業の概要 本講義ではプレゼンテーションの構成や論証、説得力を含む内容面に重点を置く。この目標を達成するために、「English Presentation I」で学習した内容の復習や高度なライティングスキルの習得も含まれる。			
授業計画 第1回：オリエンテーション 第2回：English Presentation Iの復習 第3回：主題文とトピックセンテンス 第4回：指示文 第5回：視覚効果を上げるためのトピックセンテンスと指示文 第6回：時系列と位置関係 第7回：過程と指示説明 第8回：第1回プレゼンテーション 第9回：因果関係 第10回：例示 第11回：定義 第12回：分類 第13回：比較・対比 第14回：スクリプトと視覚素材の準備			

第15回：第2回プレゼンテーション

テキスト

「Get your message across 効果的なパラグラフの書き方」

(神保尚武、Kate Elwood、Leonid Yoffe、森田彰、渡辺洋一、山田茂 共著、南雲堂)

参考書・参考資料等

「Building the essay from well-written paragraph—パラグラフ・ライティングからアカデミック・ライティングまで」(岩本 一、吉田宏予 著、東京精文館)

学生に対する評価

成績は2回のプレゼンテーション(60%)、教科書関連課題(30%)、スーパー英語(10%)で評価する。プレゼンテーションは内容・構成・説得力の他に、姿勢・アイコンタクト・ジェスチャー・声の抑揚・視覚素材の質などを基に評価する。評価は、東洋大学成績評価基準に従い「S～E」による評価を行う。

授業科目名：情報処理 基礎	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 小山 賢一
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	数理、データ活用及び人工知能に関する科目又は情報機器の操作		
授業のテーマ及び到達目標			
(1) 情報と情報技術及びこれらを活用して問題を発見・解決する方法について理解を深め技能を習得するとともに、情報社会と人との関わりについての理解を深める。			
(2) 様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用する力を養う。			
(3) 情報と情報技術を適切に活用するとともに情報社会に主体的に参画する態度を養う。			
授業の概要			
情報に関する科学的な見方や考え方を理解した上で、情報及び情報技術を活用するための知識と技能を習得、さらに適切かつ効果的に活用しながら問題の発見・解決を行う学習活動を通して、社会の中で情報及び情報技術が果たしている役割や影響を理解するとともに、情報社会とその進展に主体的に参画できる資質と能力、態度を育成することを目標とする。			
高校で学習した情報科の次の3観点8要素の中から、さらに情報処理（コンピュータ等利用）を主眼に置いた修得が目的・内容である。以下のスキルは、大学での学びの中で必須となるコンピュータ活用等の効果を高めるための基礎となる。			
○情報活用の実践力			
1. 課題や目的に応じた情報手段の適切な活用			
2. 必要な情報の主体的な収集・判断・表現・処理・創造			
3. 受け手の状況などを踏まえた発信・伝達能力			
○情報の科学的な理解			
1. 情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解			
2. 情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解			
○情報社会に参画する態度			
1. 社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解			
2. 情報モラルの必要性や情報に対する責任			
3. 望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度			
具体的には、以下の通り。			
1) 情報及び、コンピュータや情報通信ネットワークの仕組みや原理など特徴の理解			
2) 情報処理・コミュニケーション、情報伝達の原理など特徴の理解			

3) コンピュータ活用能力などの情報活用能力と問題を解決できる能力の育成

4) 情報と情報技術を適切に活用するとともに、情報社会に主体的に参画する態度の育成

授業計画

第1回：ガイダンス、情報社会とわたしたち（情報化の進展と生活、著作権・引用と参照、情報、メディア）

第2回：問題解決とコンピュータ活用概要(文書作成、表計算、プレゼンテーション、プログラミング)

第3回：情報のデジタル化とその特徴（コンピュータと2進数、デジタル情報、デジタル化の特徴、圧縮など）

第4回：コンピュータの基礎知識（コンピュータの仕組みと働き、情報処理、利用の工夫）

第5回：データの分析（平均値、分散、標準偏差、相関係数、散布図）

第6回：モデル化とシミュレーション（売り上げ予測、釣り銭問題、モンテカルロ法、乱数、スパコンなど）

第7回：プログラミング（アルゴリズム・フローチャート、順次構造・分岐構造・反復構造、プログラミング言語）

第8回：データベース（関係データモデル、ER図、正規化、SQL、トランザクション処理）

第9回：情報通信ネットワーク1（基本的な仕組み、通信プロトコル、電子メール、無線LANなど）

第10回：情報通信ネットワーク2（インターネット上のサービス、ドメイン、WWW、クラウドなど）

第11回：情報セキュリティ（機密性・完全性・可用性、コンピュータウイルス、セキュリティホール
暗号化と復号・暗号方式・暗号化通信・電子署名、個人認証とアクセス権、フィッシング詐欺など）

第12回：情報社会における法（知的財産権、引用と参照、個人情報・人格権・個人情報保護法など）

第13回：情報システムと企業活動（様々な情報システム、経営組織、財務諸表、損益分岐点、システム戦略）

第14回：システム開発技術（要件定義、設計、プログラミング、テスト、保守、プロジェクトマネジメント、PMBOK、アローダイアグラム、システム監査）

第15回：まとめ（望ましい情報社会へ）

テキスト

授業毎にPDF資料をToyoNet-ACEにて配信する。

参考書・参考資料等

「ゼロからはじめるITパスポートの教科書(改訂第七版)」（滝口直樹 著、とりい書房）

「ネットワークはなぜつながるのか 第2版」（戸根 勤 著、日経BP）

「徹底攻略 情報セキュリティマネジメント教科書 令和6年度」

（瀬戸美月、齋藤健一 共著、インプレス）

「キーワードで学ぶ最新情報トピックス2023」

（奥村晴彦、佐藤義弘、中野由章 共著、日経BP）

学生に対する評価

テスト（2回程度予定）および各自提出したレポート課題により総合的に評価する。

成績は本学の成績基準に準拠する。

授業科目名 教育基礎論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数 単位	担当教員名 葛西 耕介、大辻 永 担当形態 クラス分け・単独
科 目	教育の基礎的理解に する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事 等	教育の理念並びに教育に する歴史及び思想		
授業の到達目標及びテーマ			
本講では教育の歴史・思想などに する基礎的概念を確認し、教育が人 にとって必 の社会機能として成立する経緯とその役割を理解することを目指す。 教育が個々の人 の成 ・発 に寄与するとともに社会の維持・発展にも寄与していることをふまえ、家庭の教育機能、地域の教育力、公教育制度に着目し、それぞれがどのような発展を遂げ、どのような問 を持つのかについて、歴史的・思想的に検討する。 以上をふまえ、以下の 点を到達目標とする。 教育の歴史・思想に する基礎的概念を獲得できている。 個々人の成 ・発 、社会の維持・発展に寄与する教育の役割を毀壊している。 家庭・地域・公教育制度、それぞれの発展の歴史、役割、問 点について理解し各自の考えを整理して表現できる。			
授業の概要			
まず教育という社会事象について人 の文化の特性やその伝 様態に着目して検討する。 次に、子ども観・子育て観の変 に着目しながら、家庭、地域における教育のあり方とその変 について検討するとともに、近代公教育制度が成立する歴史的・社会的意義を考える。 また、近代の主要な教育思想を確認しながら、現代の教育が直 する諸課 について、その要因や解決の方向性について、歴史的視点をふまえながら検討する。			
授業計画			
第 回 教育についての一般的理解 教育の通念から概念へ			
第 回 人 はどこまで動物か 人 という存在の特性			
第 回 人 の文化とその伝			
第 回 教育という営みの特性			
第 回 教育可能性と教育の意義			
第 回 人 の発 についての理解			
第 回 能力モデルと教育の規定			
第 回 子ども観・子育て観の変 と現状			
第 回 近代の教育思想 西洋			
第 回 近代の教育思想 日本			

第 回 学校の誕生と発展

第 回 家庭の教育的機能

第 回 地域の教育力

第 回 家庭、地域、学校の連携

第 回 現代教育の意義と課

定期試

テキスト

テキストは使用せず、必要な資料を 布する。

参考書・参考資料等

「教職入 ： 教師への 新版 改訂2版」 藤本典裕 著、図書文化社

「新しい時代の教職入 改訂版」 秋田喜代美、佐藤学 編著、有斐 アルマ

「教育原理 改訂版」 大浦猛 編著、山文社

「中等教育原理」 吉田昇、柴田義松、 尾十三二 編著、有斐 双書

「新・教育原理」 柴田義松 編、有斐 双書

「やさしい教育原理」

田嶋一、中 新之祐、福田 美子、狩 浩二 共著、有斐 アルマ

「教職の意義と職務」 森秀夫 著、学芸図書株式会社

「実践に活かす教育基礎論・教職論」 樋口直宏、牛尾直行 編著、学事出版

「現代教育基礎論」 橋本太郎 編著、 井書店

「教職入 」 柴田義松、山崎準二 編著、学文社 その他、 宜紹介する。

学生に対する評価

授業時に提示する課 へのコメント 40 、定期試 60

授業科目名 教職概論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数 単位	担当教員名 葛西 耕介、大辻 永 担当形態 クラス分け・単独
科 目	教育の基礎的理解に する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事 等	教職の意義及び教員の役割・職務内容 チーム学校運営への対応を含む。		
授業の到達 目標及びテーマ			
本講では学校教育制度のあり方と教員という職業の特性を、子どもたちの成長・発達や教育を受ける権利の保障 という視点から検討し、現代社会において学校教育が果たしている役割とその課題 について考える視点的獲得をめざす。下記の 点を到達 目標とする。 現代社会において学校制度が果たしている役割を理解し表現できる。 教員に求められる資質・能力に する基礎的な理解を得るとともに、他の職業との比較などを通じて自らの職業 選択について具体的に検討することができる。 教育を受ける権利を保障 する法制度の理念及び実態と問題 点を理解し、自分自身の考え方を整理して表現できる。			
授業の概要			
まず近代公教育制度（学校教育制度）成立の歴史的意義を中心に検討し、現代の学校教育制度の特性とその果たすべき役割について整理する。 次に教員の資質・能力について、 成制度の歴史的検討と現代における 成制度の整理・検討により明らかにする。その 、教員の 成・採用・研修・身分保障 の連続的把握に努める。 学校という組織の特性を学校で働く多くの職種の連携の視点から検討する。			
授業計画			
第 1 回 学校・教員の役割 受講者の認識を確認し本講の目的を理解する			
第 2 回 教育課程と学校・教員 教育課程についての一般的理解			
第 3 回 学校教育制度（公教育制度）の特性―寺子屋と学校			
第 4 回 近代公教育制度誕生の歴史的意義			
第 5 回 戦前・戦中の教員 成			
第 6 回 戦後教育改 と教員 成制度			
第 7 回 学校・教員をめぐる法制度			
第 8 回 教員の 成 課程認定制度の意義と変			
第 9 回 教員の採用 「 考」の意味			
第 10 回 教員の研修 教員が「学びつづける」意義			
第 11 回 教員の身分・服務			
第 12 回 学校という組織のあり方と担い手			

第 回 学校・教員と保護者

第 回 学校と地域の連携

第 回 本講のまとめ 学校が「チーム」として機能する意味

定期試

テキスト

本講義を一冊でカバーするテキストはないので特に指定しない。

複数の参考書を基に作成した資料を 付する

参考書・参考資料等

中学校学習指導要 平成30年7月告示 文 科学省

等学校学習指導要 平成30年7月告示 文 科学省

中学校学習指導要 解説 総則編 平成30年7月 文 科学省

等学校学習指導要 解説 総則編 平成30年7月 文 科学省

「中等教育原理」 吉田昇、柴田義松、 尾十三二 編著、有斐 双書

「教育原理 改訂版」 大浦猛 編著、山文社

「新・教育原理」 柴田義松 編、有斐 双書

「新しい時代の教職入 改訂版」 秋田喜代美、佐藤学 編著、有斐 アルマ

「やさしい教育原理」

田嶋一、中 新之祐、福田 美子、狩 浩二 共著、有斐 アルマ

「教職の意義と職務」 森秀夫 著、学芸図書株式会社

「実践に活かす教育基礎論・教職論」 樋口直宏、牛尾直行 編著、学事出版

「現代教育基礎論」 橋本太郎 編著、 井書店

「教職入 」 柴田義松、山崎準二 編著、学文社

「教職入 : 教師への 新版 改訂2版」 藤本典裕 著、図書文化社

学生に対する評価

授業時に提示する課 へのコメント 40 、定期試 60

授業科目名 教育制度論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数 単位	担当教員名 葛西　　ふ　耕介、西村　吉 弘
			担当形態　クラス分け・単独
科　目	教育の基礎的理解に　する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事　等	教育に　する社会的、制度的又は経営的事　　学校と地域との　携 及び学校安全への対応を含む。		
授業の到　目標及びテーマ			
学校教育制度とその法制や行政制度の基本的性格を検討し、その意義と現代的課　について の理解を深めること、教育を支える学校・家庭・地域の　携のあり方について、その現状と問 点・課　についての理解を深めることを目標とする。			
以上をふまえ、次の到　目標を設定する。			
学校教育制度の歴史と現状・課　を理解で得きる。			
学校制度をめぐる法制と教育行政制度のあり方と課　を理解できる。			
学校の教育活動とそれを支える学校経営・学級経営について理解できる。			
学校・教職員、地域、家庭の　携の意義と課　について理解できる。			
授業の概要			
子ども、家庭、学校、教員をめぐる状況と課　を検討した後、学校教育制度の歴史と現状、 法制、教育行政制度、学校・教職員に　する法制度、学校経営・学級経営など、学校を中心と した教育制度の基礎的概念の確認と課　の析出と検討を行う。			
授業計画			
第　回　子ども・家庭・学校・教員をめぐる状況と課			
第　回　子どもの現状と指導上の課			
第　回　学校教育制度　公教育制度　の誕生とその特性			
第　回　学校制度の現状と課			
第　回　学校教育の法的性格			
第　回　教育行政の理念と制度			
第　回　学校・教職員をめぐる法制度			
第　回　教職員の職務の特性と課			
第　回　学校という組織のあり方と担い手			
第　　回　学校経営・学級経営の理念と実態			
第　　回　学校の安全確保と子ども			
第　　回　諸外国の教育制度			
第　　回　諸外国の教職員			

第 回 教育政策の現代的課

第 回 子ども・家庭・地域・学校の 携の意義と課

定期試

テキスト

横井敏 編『教育行政学 第4版 子ども・若者の未来を拓く』八千代出版

参考書・参考 料等

山住正己『日本教育小史』岩波新書

森 『モダンのアンスタンス』ハーベスト社

森川 紀『教育勅語への 増補版 』三元社

藤本典裕・勝ふ正章編『教育行政学』学文社

藤本典裕・制度研編『学校から見える子どもの 困』大月書店

その他、 宜紹介する。

学生に対する評価

授業時に提示する課 へのコメント 40 、定期試 60

授業科目名 教育心理学	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数 単位	担当教員名 榎本 淳子、扇原 志
			担当形態 クラス分け・単独
科 目	教育の基礎的理解に する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事 等	幼児、児童及び生徒の心 の発 及び学習の 程		
授業の到達 目標及びテーマ			
1) 幼児、児童及び生徒の心 の発 に対する外的及び内的要因の相互作用、発 に する代表的理論を まえ、発 の概念及び教育における発 理解の意義を理解している。			
2) 乳幼児期から 年期の各時期における 動発 ・言語発 ・認知発 ・社会性の発 について、その具体的な内容を理解している。			
3) 様々な学習の形態や概念及びその 程を説明する代表的理論の基礎を理解している。			
4) 主体的学習を支える動機づけ・ 団づくり・学習評価の在り方について、発 の特徴と付けて理解している。			
5) 幼児、児童及び生徒の心 の発 を まえ、主体的な学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解している。			
授業の概要			
学校現場は学習の場であるとともに、生徒の心 の成 を支える場でもある。教師には、様々な生徒を理解し、より 切に成 を促す働きかけが求められる。本□義は、幼児、児童及び生徒の心 の発 及び学習の 程について、基礎的な知 を につけ、各発 段 における心理的特性を まえた学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解する。本□義を して、将来の教育実 場 において生徒理解に必要な基礎的な心理学的視点を獲得してほしい。			
授業計画			
第 回 オリエンテーション 教育心理学で学ぶこと			
第 回 心理学とは何か			
第 回 乳幼児期の発			
第 回 児童期・ 年期の発			
第 回 団生活と発			
第 回 学習 行動論的アプローチ			
第 回 学習 認知論・情報処理理論的アプローチ			
第 回 学習意欲 動機づけとは何か			
第 回 学習意欲 教育現場での応用			
第 回 記憶 記憶とは何か			
第 回 メタ認知			

第 回 知能とは何か

第 回 学習評価

第 回 教育心理学の要点

第 回 全体のまとめと振り返り

定期試

テキスト

「ようこそ教育心理学の世界へ [第3版]」 神藤 昭、久木山健一 共著、北樹出版

参考書・参考 料等

「実 につながる教育心理学 [改訂版]」 櫻井茂男 監修、 田祐二 編、北樹出版

「絶対役立つ教育心理学 [第2版]」 藤田哲也 編、ミネルヴァ書房

学生に対する評価

学期末に行う試 により評価する。

成績評価の基準は東洋大学の基準に準拠する。

授業科目名 特別支援教育基礎論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数 単位	担当教員名 内河 水穂子
			担当形態 単独
科 目	教育の基礎的理解に する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事 等	特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解		
授業の到 目標及びテーマ			
・ 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の 害の特性及び心 の発 を理解する。 ・ 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する教育課程や支援の方法を理解する ・ 害はないが特別の教育的ニーズのある幼児 児童及び生徒の学習上又は生活上の困 とそ の対応を理解する。			
授業の概要			
常の学級にも在籍している発 害や 度知的 害をはじめとする様々な 害等により特別の支 援を必要とする幼児、児童及び生徒が授業において学習活動に参加している実感・ 成感をもちながら 学び 生きる力を に付けていくことができるよう、幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困 を 理解し、個別の教育的ニーズに対して、他の教員や 係機 と 携しながら組織的に対応していくため に必要な知 や支援方法を理解する。			
授業計画			
第 回 特別支援教育に する制度の理念と仕組み			
第 回 インクルーシブ教育システムと多様な学びの場			
第 回 視覚 害			
第 回 聴覚 害			
第 回 知的 害			
第 回 肢体不自由と病弱			
第 回 発 害			
第 回 常の学級における特別支援教育			
第 回 特別支援教育における教育課程の編成と実施			
第 回 個別の教育支援計画と個別の指導計画			
第 回 自立活動の目標と指導内容			
第 回 級による指導・交流及び共同学習			
第 回 特別支援教育コーディネーターの役割			
第 回 特別支援学校のセンター的機能と地域との 携			
第 回 母国語や 困の間 等に 因する特別支援教育			
定期試			
テキスト			
参考書等を基に自作教材を使用する。			
参考書・参考 料等			
幼稚園教育要 平成29年3月告示 文 科学省			
小学校学習指導要 平成29年3月告示 文 科学省			

中学校学習指導要 平成29年3月告示 文 科学省
 等学校学習指導要 平成30年7月告示 文 科学省
 特別支援学校幼稚 教育要 平成29年4月告示 文 科学省
 特別支援学校小学 ・中学 学習指導要 平成29年4月告示 文 科学省
 特別支援学校 等 学習指導要 平成31年2月告示 文 科学省
 「特別支援学校のすべてがわかる 教員をめざすあなたへ」 宮 英憲監修 全国特別支援学
 校 会編著ジアース教育新社
 「特別の支援を必要とする子どもの理解」 細渕富夫、伊勢正明、大江啓 共著、建帛社)
 「特別支援教育の基礎・基本新訂版」 国立特別支援教育研究所編、ジアース教育新社
 「特別支援教育の基礎」 杉ふ学、沼俊夫、永垂希 編、大学図書出版

学生に対する評価

①授業態度・授業への参加度(30%) ②コメントペーパー 10%) ③課 レポートの提出(20% ④定
期試 (40%)により、総合的に評価する。 ① ② ③ ④ 100%

なお、全授業回数の3分の1を えて欠席した者は、成績評価の対 としない。

成績評価の基準は、東洋大学の成績評価の基準に準拠する。

授業科目名 教育 程	教員の免 状取得のための 必修科目	単位数 単位	担当教員名 大 永 担当形態 単独
科 目	教育の基礎的理 に する科目		
施(則に定める 科目区分又は事 等	教育 程の意義及び編成の方法 カリキュラム・マネジメントを含む。		
授業の到 目標及びテーマ			
①教育 程の目的や編成原理を理 する。②教育 程と学習指導 の歴史的な変 に対する理 を深める。③学校教育のカリキュラム編成とマネジメントをどのように(うのか理 し、受 生自 の として探究できる。			
授業の概			
今日的な教育 と教育改 の動向を概 し、教育 程の意義や編成の目的を考察する。教育 程の 型や編成原理の理 、歴史的な変 に対する理 を深める。学校教育のカリキュラム編成とマネジメントをどのように(うのか、受 生自 の として考察する。			
授業 画			
第 回 オリエンテーション。教育 程 カリキュラム とは何か。			
第 回 教育 程 の歴史的展			
第 回 カリキュラムの 型と編成の原理			
第 回 教育 程と法			
第 回 教育 程と学習指導 の歴史的展 1947年、1951年、1958年の改			
第 回 教育 程と学習指導 の歴史的展 1968年、1977年、1989年の改			
第 回 教育 程と学習指導 の歴史的展 1998年改 とそれ以			
第 回 総合学習の歴史とカリキュラム			
第 回 総合学習の授業づくりと授業分析			
第 回 カリキュラム構成法としての「発生的方法」			
第 回 カリキュラム構成法としての「発生的方法」 授業分析			
第 回 オープンスクールとカリキュラム			
第 回 ホリスティック教育とカリキュラム			
第 回 カリキュラム 価			
第 回 まとめとテスト			
テキスト			
本 義を一冊でカバーするテキストはないので特に指定しなし。8 数の参考書を基に作成した 料を 付する。			
参考書・参考 料等			

中学校学習指導 平成30年7月告示 文 科学省

等学校学習指導 平成30年7月告示 文 科学省

中学校学習指導 総則編 平成30年7月 文 科学省

等学校学習指導 総則編 平成30年7月 文 科学省

「A Comprehensive Introduction, Boston: Little Brown and Company」 John D. McNeil
著、Curriculum

「教育 程 カリキュラム入 」 柴田義松 著、有斐

「実 に活かす教育基礎 ・教職 』 樋口直宏、牛尾直(編著、学事出版

「学校教育とカリキュラム」 山田恵吾、藤田祐介、 塚茂樹 著、文化書房博友社

学生に対する 価

学期末筆 、 授業への参加、 への 献、 中 、を総合して 価する。
を主とし、 と を 完的に考慮して総合的な 価を(う。

成績 価基準は東洋大学の成績 価の基準に準拠する。

授業科目名	教員の免 状取得のための	単位数	担当教員名
特別活動と総合的な学	必修科目	単位	後藤 正彦
習の時 等の指導法			担当形態 単独
科 目	徳、総合的な学習の時 等の指導法及び生徒指導、教育相 等に する科目		
施(則に定める	・ 総合的な探求の時 等の指導法		
科目区分又は事 等	・ 特別活動の指導法		
授業の到 目標及びテーマ			
・ 特別活動の意義をとらえ、特別活動の目標と内容を理 することができる。			
・ 特別活動における各活動・学校(事の特 をとらえ、それぞれの指導法を理 することができる。			
・ 総合的な学習の時 等の意義をとらえ、これの目標と内容、指導方法を理 することができる。			
・ 総合的な学習の時 等の指導 画作成の基本方 と作成上の留意点を理 することができる。			
・ 総合的な学習の時 等の指導と 価の基本方 と実 上の留意点を理 することができる。			
授業の概			
特別活動は、学校における多種多様な 団での活動をして、 の発 や 決を(い、よりよい 団や学校生活をめざしていく活動である。体 活動や異年 団活動を する点に特徴があり、この点に教育的意義を有している。本 義では、特別活動の意義や役割について考察し、教員としての基礎的な力 を うことをねらう。特別活動の教育 程上の位置づけや内容、指導方法、 価などの特 から、人 形成における特別活動の意義や役割についても理 する。また、学年の いによる活動の変化や他教科との 、 「チーム学校」としての家庭・地域との 携という 点からも特別活動の特 について学んでいく。			
総合的な学習の時 は、探究的な 方考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を(い、よりよい を 決し、自己の生き方を考えていくための 能力の育成をめざす教育活動である。本 義では、各教科等で育成される 方考え方を総合的に活用して、広範な事 を多種多様な 点から俯瞰してとらえ、実社会実生活の を探究する学びが実現できるよう、指導 画作成や具体的な指導の仕方、学習活動の 価に する知 技能の習得をめざす。			
授業 画			
第 回 教育 程における特別活動の位置づけとその役割			
第 回 特別活動の目標と内容			
第 回 学級活動・ホームルーム活動の活動内容とその特			
第 回 児童会・生徒会活動およびクラブ活動の活動内容とその特			
第 回 学校(事の活動内容とその特			
第 回 特別活動における 価と改善活動			
第 回 特別活動の指導 画作成と組織 携の在り方			

第 回 教育 程における総合的な学習の時 の位置づけとその役割

第 回 総合的な学習の時 の目標と内容

第 回 総合的な学習の時 における年 指導 画の作成

第 回 総合的な学習の時 における単元 画の作成

第 回 単元 画の発3

第 回 総合的な学習の時 における指導方法

第 回 総合的な学習の時 における 価と改善活動

第 回 ・ まとめ

テキスト

中学校学習指導 平成30年7月告示 文 科学省

等学校学習指導 平成30年7月告示 文 科学省

中学校学習指導 総合的な探求の時 編 平成30年7月 文 科学省

等学校学習指導 特別活動編 平成30年7月 文 科学省

「特別活動指導法 改 2版」 渡 、緑川哲夫、桑原憲一 編著、日本文教出版

「中学校学習指導 (平成29年告示) 総合的な学習の時 編 平成29年7月」

東山書房

その他、毎回教材を 布する。

参考書・参考 料等

「中学校学習指導 (平成29年告示) 特別活動編 平成29年7月」 東山書房

「今、求められる力を める総合的な学習の時 の展 」 文 科学省、アイフィス

「総合的な学習の時 の指導法 (教育 程コアカリキュラム対応 大学用テキスト 理 と実 の融合)」 村川 弘、藤井千春、 口徹、 井 哉、原田三朗 編著、日本文教出版

学生に対する 価

・学習姿勢 レポート 期末 これら つの総合 価。原則として、
義 分の 以上の出席者を成績 価の対 とする。

授業科目名 教育方法 の理 と実 情報 信技 を含む	教員の免 状取得のための 必修科目	単位数 単位	担当教員名 佐久 大 担当形態 単独
科 目	徳、総合的な学習の時 等の指導法及び生徒指導、教育相 等に する科目		
施(則に定める 科目区分又は事 等	教育の方法及び技 情報 信技 を活用した教育の理 及び方法		
授業のテーマ及び到 目標			
【教育の方法及び技 、情報 信技 の活用に する基礎的な知 ・技能の習得と実 】 これからの社会を担う子供たちに求められる ・能力を育成するために必 な、教育の方 法、教育の技 、情報 信技 の活用に する基礎的な知 ・技能と教育現場で実 できる力 を に付ける。			
教育の方法及び技 これからの社会を担う子供たちに求められる ・能力を育成する ために必 な教育の方法を理 する。また、教育の目的に した指導技 を理 し、 に付け る。			
【到 目標】 教育の方法の基礎的理 と実 を理 している。 これからの社会を担う子供たちに求められる ・能力を育成するための教育方法の在り 方 主体的・対 的で深い学びの実現等 を理 している。 学級、生徒、教員、教室、教材など授業を構成する基礎的な 件を理 している。 学習 価の基礎的な考え方を理 している。 法・板書など、授業を(う上での基礎的な技 を に付けている。 基礎的な学習指導理 を まえて、目標・内容、教材・教具、授業・学習形態、 価 準等の 点を含めた学習指導案を作成することができる。			
情報 信技 を活用した教育の理 及び方法 1 情報 信技 を効果的に活用した学習 指導、 2 校務の推 の在り方、 3 生徒に情報活用能力 情報モラルを含む を育成する ための指導法に する基礎的な知 ・技能を に付ける。			
1 情報 信技 の活用の意義と理 情報 信技 の活用の意義と理 を理 する。			
【到 目標】 社会的背景の変化や急 な技 の発展も まえ、個別最 な学びと協働的な学びの実現や 、主体的・対 的で深い学びの実現に向けた授業改善の必 性など、情報 信技 の活用の 意義と在り方を理 している。 特別の支援を必 とする生徒に対する情報 信技 の活用の意義と活用に応じた留意			

点を理している。

ICT支援員などの外 人材や大学等の外 機 との 携の在り方、学校におけるICT環境の整備の在り方を理している。

2 情報 信技 を効果的に活用した学習指導や校務の推 情報 信技 を効果的に活用した学習指導や校務の推 の在り方について理 する。

【到 目標】

育成を目指す ・能力や学習場 に応じた情報 信技 を効果的に活用した指導事例デジタル教材の作成・利用を含む。 を理 し、基礎的な指導法を に付けている。

学習履歴 スタディ・ログ など教育データを活用して指導や学習 価に活用することや教育情報セキュリティの 性について理 している。

ム・オンライン教育の意義や するシステムの使用法を理 している。

統合型校務支援システムを含む情報 信技 を効果的に活用した校務の推 について理 している。

3 生徒に情報活用能力 情報モラルを含む。を育成するための指導法 生徒に情 活用能力 情 モラルを含む。 を育成するための基礎的な指導法を に付ける。

【到 目標】

各教科、 徳、特別活動、総合的な学習の時 以下「各教科」という において、横断的に育成する情報活用能力 情報モラルを含む について、その内容を理 している。

情報活用能力 情報モラルを含む について、各教科等の特性に応じた指導事例を理 し、基礎的な指導法を に付けている。

生徒に情報 信機器の基本的な操作を に付けさせるための指導法を に付けている。

授業の概

本授業では、学習指導 に示されている三つの ・能力の獲得を目指し、教育の方法及び技 、情報 信技 を活用した教育の理 及び方法に する基礎的な知 ・技能の習得と実 について、主体的・対 的な学びになるように構成する。授業では、目的を共有することをする。基本的にアクティブ・ラーニングを指導方法の中核とする。学生が主体的・対 的に授業が構成できるよう取り組む。協 や発3 形式を し、相互 価を取り入れながら検 し、常に互いにモニタリングしながら、さらなる改善につなげていく。

教育方法に する興味・ 心を持てるような情報提供を心掛け、ICTを活用した情報検索の方法を伝えるとともに、学生自らが情報入手できる方法を教授する。また、必 に応じて、 義用プリントなどを作成する。

本授業で得た知 については、受 者の全員対 に発3 形式で(い、全員で共有するとともに、相互 価3 を用いてさらなる改善を求め続ける。また、得られた知 や成果はICT情報スペース ToyoNet-ACE 上で共有できるようにし、それぞれの年度 画作成に使えるようにする。協 や発3 等の実施に しては、実施後に検 会を実施し、授業 察力や授業構成力の向上を目指す。また、相互 価3 を用いた学習活動を構想し、自己 価と他者 価の意義や価値を体得する。

授業 画

教育の方法コアカリキュラムと授業概 示した 素とが各回の授業で有機的に結びつくよう授業画に位置付ける。

第1回 教育の方法の基本的な

第2回 求められる ・能力を育成するために必 必要な教育の方法についての基本理念

第3回 授業方法と教授組織

第4回 授業の形態 一斉学習、グループ学習、個別学習

第5回 授業の 画 教材研究の方法、学習単元と学習指導案の作成

第6回 授業の技 し方、 明、発問、板書など

第7回 授業の 価 断的 価、形成的 価、総括的 価

第8回 情報 信技 を効果的に活用した学習指導① 教授メディアの理

第9回 情報 信技 を効果的に活用した学習指導② 教授メディアの特色とその活用

第10回 校務の推 の在り方

第11回 生徒に情報活用能力① 情報検索とインターネットの活用 情報モラル含む

第12回 生徒に情報活用能力② ネットワーク環境を利用した学習形態と学習モデル

第13回 授業の実 ① 個別最 々な学び

第14回 授業の実 ② 協働的な学び

第15回 教育の方法及び技 、情報 信技 を活用した教育の理 及び方法の総括 と展望

第1回から第7回までは「教育の方法及び技 」である。第8回から第14回までが「情報 信技 を活用した教育の理 及び方法」である。15回の 義終了後に を実施する。

テキスト

「 校教員のための探究学習入 一問いからはじめる7つのステップ」 佐藤浩章 編著、ナカニシヤ出版

「すぐできるオンライン授業」 後藤 一他著 化学同人

参考書・参考 料等

文 科学省『中学校学習指導 平成 29 年告示 』

文 科学省『 等学校学習指導 平成 30 年告示 』

「やさしい教育心理学 第5版」 原 彦、竹綱 一 共著、有斐 アルマ

「よくわかる教育 価」 (田中耕治 編、ミネルヴァ書房)

「よくわかる授業 」 (田中耕治 編、ミネルヴァ書房)

その他 義内容にあわせて 宜紹介する。

学生に対する 価

成績 価は、授業への参加度、レポート、 により総合的に判断する。レポート、 については、上 到 目標にある内容についての理 ・習得度を問うものとする。その上で、「東洋大学成績 価基準」に則り、 価する。

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：
生徒指導論（進路指導論を含む）	必修科目	2単位	榎本 淳子、後藤 正彦
		担当形態：クラス分け・単独	
科 目	道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目		
施行規則に定める	生徒指導の理論及び方法		
科目区分又は事項等	進路指導及びキャリア教育の理論及び方法		
授業の到達目標及びテーマ			
生徒指導、及び進路指導・キャリア教育の意義及び理論について考え、指導の在り方、進め方を理解する。			
〔到達目標〕			
(1) 教育課程、および学校教育活動全体を通じた生徒指導及び進路指導・キャリア教育の位置づけを理解する			
(2) 生徒指導における集団指導・個別指導の方法原理、及び進路指導・キャリア教育におけるガイダンス機能とカウンセリング機能の意義や留意点を理解する。			
(3) 組織的な指導体制、年間指導計画に基づいた取組みの重要性について理解するとともに、それぞれの指導体制における家庭や関係諸機関との連携の在り方を理解する。			
(4) キャリア教育におけるポートフォリオの活用の在り方やキャリアカウンセリングの基礎的な考え方、また職業に関する体験活動を核としたカリキュラムの意義を理解する。			
(5) 校則、懲戒、体罰等の生徒指導に関する主な法令の内容、及びいじめや不登校、児童虐待といった生徒指導上の課題についての定義やその対応を理解する。			
授業の概要			
生徒指導は、一人一人の生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して教育活動全体を通じ行われる、学習指導と並ぶ重要な教育活動である。本講義では他の教職員や関係機関と連携しながら組織的に生徒指導を進めていくために必要な知識・技術を学ぶとともに、に教育現場で生じている具体的な問題への取り組み方など実践的対応力を身につける。			
進路指導は、生徒が自ら、将来の進路を選択・計画し、その後の生活によりよく適応し、能力を伸長するように、教員が組織的・継続的に指導・援助する過程であり、長期的展望に立った人間形成を目指す教育活動である。キャリア教育は進路指導の中核であり、学校と社会との接続を基盤に一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な資質・能力を育むことを目的としている。本講義では進路指導・キャリア教育の視点に立った授業改善や体験活動、ガイダンスとカウンセリングの充実、それに向けた学校内外の組織的体制に必要な知識を学ぶ。			
授業計画			

第1回：オリエンテーション：生徒指導、進路指導について考える

第2回：生徒指導の理論と定義

第3回：生徒指導の意義と教育課程における位置づけ

第4回：学校における生徒指導体制と年間計画

第5回：教育現場における生徒指導上の課題（不登校いじめ）

第6回：現代社会における生徒指導上の課題（児童虐待など）と諸機関との連携

第7回：生徒を導く：集団指導

第8回：生徒を導く：個別指導

第9回：生徒を理解する：児童生徒の発達

第10回：進路指導、キャリア教育の理論と実際（ガイダンスとカウンセリングを含む）

第11回：進路指導、キャリア教育の意義と教育課程における位置づけ

第12回：学校における進路指導・キャリア教育における組織的な指導体制と計画

第13回：生徒の発達にあったキャリア教育の実践(ポートフォリオの活用/体験活動の在り方)

第14回：生徒指導、進路指導の要点

第15回：全体のまとめと振り返り

15回の講義終了後に試験を実施する。

テキスト

「生徒指導提要」（文部科学省、教育図書株式会社）

さらに、授業中にプリントを毎回配布する。

参考書・参考資料等

文部科学省「生徒指導提要」教育図書

「生徒指導提要 改訂の解説とポイント 積極的な生徒指導を目指して」2023年5月（中村豊、ミネルヴァ書房）

「中学校 キャリア教育の手引き」（文部科学省、教育出版）

「新しい時代の生徒指導・キャリア教育」（和田孝、有村久春 編著、ミネルヴァ書房）

「発達と臨床の心理学」（渡辺弥生・榎本淳子編著 ナカニシヤ出版）

学生に対する評価

学期末に行う試験により評価する。

成績評価の基準は東洋大学の基準に準拠する。

授業科目名： 教育相談	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 篠崎 信之、相楽 直子 担当形態：クラス分け、単独
科 目	道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法		
授業の到達目標及びテーマ 〔テーマ〕 生徒がよりよく適応するための、生徒理解・援助の基本および、体制作りについて学ぶ。 〔到達目標〕 1)教育相談の意義・体制・機会等、全体像について説明できる。 2)生徒が陥りうる代表的な不適応問題を理解し、基本的な対応について説明できる。 3)いくつかのカウンセリング法の基礎を理解し、それを生徒や保護者との関わりに活かしているところをイメージできる。 4)スクールカウンセラー等の専門家および外部専門機関と連携するための基礎知識が身についている。			
授業の概要 教育相談とは、一人一人の生徒の教育上の問題について、生徒自身または保護者に助言・援助をすることです。この活動では、不適応状態に陥った生徒の再適応を助けるだけでなく、問題の予防を目的とした援助や、自己実現を助ける開発的援助もなされます。保護者は生徒に大きな影響を与えうるため、保護者に対する適切な対応も必要となります。教育相談は、教育相談担当教員、スクールカウンセラーといった特定のスタッフだけではなく、全教師に要求される活動です。本授業では、こうした援助活動の全体像、生徒の不適応問題、生徒や保護者への援助活動の基礎となる生徒理解やカウンセリングの知識を学ぶことになります。			
授業計画 第1回：構成的グループエンカウンター演習と開発的教育相談の理論 第2回：教育相談の定義・目的 第3回：教育相談の体制・連携・機会 第4回：生徒の不適応問題の理解と援助Ⅰ（精神病・神経症レベルの問題を中心に） 第5回：生徒の不適応問題の理解と援助Ⅱ（その他の精神障害・心身症を中心に） 第6回：生徒の不適応問題の理解と援助Ⅲ（いじめ・不登校を中心に） 第7回：カウンセリングに関する基礎的な知識Ⅰ（援助者の基本的な態度・技法について） 第8回：カウンセリングに関する基礎的な知識Ⅱ（カウンセリングマインドの意義を中心に） 第9回：個人相談事例の考察			

第10回：生徒の不適切な行動の理解と援助

第11回：生徒の不適切な思考の理解と援助

第12回：ソーシャルスキルが未熟な生徒の理解と援助

第13回：担任教師によるソーシャルスキルの育成

第14回：生徒のパーソナリティ理解の方法（自我の発達の見地から）

第15回：生徒の対人関係上の問題の理解と指導

定期試験

テキスト

「教育相談の理論と方法 コアカリキュラム対応（2019）」（会沢信彦 編著、北樹出版）

その他、ToyoNet-Aceで配信する資料を使用。必要な資料を授業前にToyoNet-ACEにアップロードします。

参考書・参考資料等

「生徒指導提要」（文部科学省、教育図書株式会社）

全般的な参考書としては、上記を挙げます。各回の参考資料は、それぞれの回の配付資料に記します。

学生に対する評価

1)成績評価は、授業中の小レポート（10%）、定期試験（90%）にもとづいて行う予定です。

2)本学の成績評価基準に従って成績をつけます。

シラバス：教職実践演習

シラバス： 教職実践演習（中・高）		単位数：2単位		担当教員名：：葛西（高野）耕介、 大辻 永 担当形態：クラス分け・単独	
科 目	教育実践に関する科目				
履修時期	4年次後期	履修履歴の把握(※1)	○	学校現場の意見聴取(※2)	○
受講者数 30人（クラス分けで実施。1クラス30名）					
教員の連携・協力体制					
東洋大学教職センター運営委員会の運営委員として選出された認定課程を有する各学科等の教科専門科目を担う教職専任教員及び教職専門科目を担う教職専任教員が連携し、円滑に授業が運営されるよう調整する。具体的には、授業内容にしたがい異なる専門分野を専攻する各教員が、授業運営について助言を行なう。また、現職の学校教員、教育委員会の指導主事等のゲストティーチャーを招聘し、指導を受ける機会を設けている。 なお、履修履歴の把握作業の一環として、2年次終了時点で、主に教科科目を担当する教員が学生から履修カルテの提出を受けて内容を点検し、必要に応じて教職専任教員に連絡、教職専任教員が学生と面談するなどの協力体制をとりながら4年次秋学期の教職実践演習に指導を繋げている。					
授業のテーマ及び到達目標					
〔授業のテーマ〕： 教職資質・能力の補完と充実					
〔到達目標〕： 本科目の学修到達目標は、以下の3点とする。 ・自己の教職資質を振り返り、教職全体の任務との関係で、課題を持つこと。 ・教職に就く上で基礎的・基本的な能力を身に付けること。 ・教科指導においてより高度な知識・能力を獲得すべく、作業や活動に積極的に取り組むこと。					
授業の概要					
4年間の学習を振り返り、教職に必要な以下の資質・能力について、グループワーク、フィールドワーク等を含めた活動により実践的な基礎力を身に付ける。 ・使命感や責任感、教育的愛情 ・社会性や対人関係能力 ・児童生徒理解や学級経営等に関する能力 ・教科内容等の指導力 また、学校現場の実状についてよりよく把握するために、現職の学校教員またはその経験者を招き、指導を受ける機会を設ける。 さらに、学校現場などでのフィールドワークを行い、受講生各自が設定する課題について考察を深める機会を設ける。フィールドワークの成果は、東洋大学授業支援システム（ToyoNet-Ace）を活用して、担当教員と全受講生で共有し、双方向の学びを実現する。					

授業計画

- 第1回：これまでの学修を振り返る① 教職課程の振り返りと教師の任務について、フィールドワークに関する説明
- 第2回：これまでの学修を振り返る② 「教職パスポート」の確認と教育実習の振り返り
- 第3回：教職を取り巻く現状と教師の使命
- 第4回：教師の仕事と自己診断
- 第5回：現場の教師から学ぶ（講演会）
- 第6回：児童生徒理解と学級経営
- 第7回：保護者や地域との連携
- 第8回：特別な支援を必要とする児童生徒への対応（授業内・授業外）
- 第9回：教科内容等の指導力を点検する① プロセスを考慮した指導アプローチ
- 第10回：教科内容等の指導力を点検する② 実践的な学習指導案の作成
- 第11回：教科内容等の指導力を点検する③ 模擬授業(1)（円滑な導入のための工夫）
- 第12回：教科内容等の指導力を点検する④ 模擬授業(2)（ICTの活用、生徒との効果的なインタラクション）
- 第13回：教科内容等の指導力を点検する⑤ 評価と測定
- 第14回：各自の資質能力を確認する
- 第15回：講義全体のまとめ（最終試験を含む）

テキスト

「教職エッセンシャルー学び続ける教師をめざす実践演習」（山崎準二・藤本典裕・幸田国広 編著 学文社）

参考書・参考資料等

- 「中学校学習指導要領解説（総則編）」（文部科学省 ぎょうせい）
- 「中学校学習指導要領〈平成29年告示〉解説（数学編）」（文部科学省 日本文教出版）
- 「中学校学習指導要領〈平成29年告示〉解説（理科編）」（文部科学省 学校図書）
- 「高等学校学習指導要領〈平成30年告示〉解説」（文部科学省 東洋館出版社）
- 「高等学校学習指導要領〈平成30年告示〉解説（数学編）」（文部科学省 学校図書）
- 「高等学校学習指導要領〈平成30年告示〉解説（理科編）」（文部科学省 実教出版）
- 「高等学校学習指導要領〈平成30年告示〉解説（情報編）」（文部科学省 実教出版）
- 「自己成長を目指す教職実践演習」（原田恵理子、森山賢一 編著 北樹出版）
- 「教職実践演習」（青木秀雄 編 明星大学出版会）
- 「教職実践演習ワークブック」（西岡加名恵、石井英真、川地亜弥子、北原琢也 共著 ミネルヴァ書房）
- 「21世紀型スキルー学びと評価の新たなカタチ」（P.グリフィン他編、三宅なほみ監訳 北大路書房）
- 「未来をつくる教育ESDー持続可能な多文化社会をめざして」（五島敦子・関口知子編著 明石書店）
- 「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」（溝上慎一 東信堂）

学生に対する評価

授業内の参加度（20％）、模擬授業（10％）、指導案を含む提出物（20％）、最終試験（50％）の総合評価とする。成績評価基準は、東洋大学の成績評価の基準に準拠する。

- ※1 履修カルテを作成し、これを踏まえた指導を行う体制が備えられていることを確認し、「○」と記載すること。
- ※2 授業計画の立案にあたって教育委員会や学校現場の意見を聞いた場合には「○」と記載すること。そうでない場合は空欄とせず、「×」とすること。